

聖典 大乘サンガータスートラ ダルマパルヤヤ

全ての仏陀と菩薩へ敬意を表す

我はこれを同時に聞いた。尊い人（世尊）はラージャグリハの靈鷲頂にて、アジャナカウンディンヤ尊者、マハマウガルヤヤナ尊者、シャリプートラ尊者、マハカシャパ尊者、ラフーラ尊者、バックーラ尊者、パドラパーラ尊者、パドラシュリ尊者、チャンダナシュリ尊者、ジャングーラ尊者、スプティ尊者、レヴァタ尊者、ナンダセナ尊者、アナンダ尊者など三万二千の僧集団；そして偉大なる菩薩マイトレーヤ、偉大なる菩薩サルヴァシューラ、偉大なる菩薩クマラシュリ、偉大なる菩薩クマラヴァシン、偉大なる菩薩クマラバードラ、偉大なる菩薩アヌナ、偉大なる菩薩マンジューシュリ、偉大なる菩薩サマンタバードラ、偉大なる菩薩スダルシャナ、偉大なる菩薩バイシャヤセナ、偉大なる菩薩ヴァジュラセナなどの六万二千の菩薩；そして神童アルジューナ、神童バードラ、神童スバードラ、神童ダルマルチ、神童チャンダナガルバ、神童チャンダナヴァシン、神童チャンダナなどの一万二千の神童；そして神女童ムルダンギニ、神女童プラサダヴァティ、神女童マハトマサンプラユクタ、神女童壮麗なる眼、神女童プラジャパティヴァシニ、神女童バリニ、神女童壮麗なる富、神女童スバフユクタなど八千の神女童；そして竜王アパララ、竜王エラパトラ、竜王ティミンジラ、竜王クンバーサラ、竜王クンバーシルシャ、善因の竜王、竜王スナンダ、竜王スシャカ、竜王ガヴァシルシャなどの八千の竜王に法を説いていた。

彼らは皆、ラージャグリハのあった所、靈鷲頂のあった所、そして尊い人のいた所へ赴いた。そこへ着くと彼らは、尊い人の足元に頭をつけて礼拝し、尊い人を三度周縁し、それから皆彼の前に座った。尊い人は沈黙でもって彼らの存在に同意した。それから偉大なる菩薩サルヴァシューラが立ち上がった。彼は上衣を肩に掛け、右膝を地につけ、そして尊い人へ向かって合掌し、礼拝し、彼に次のように話しかけた；「尊い人よ、百万の神々、百万の神童、数百万の菩薩が集まりました。尊い人よ、数百万の声聞比丘が集まり、数々の竜王も集まり、法を聞くために着座いたしました。ですから如来、阿羅漢、完全なる覚者の仏陀よ、聞くがいなや、年老いた有情は即座に全ての業による障害を浄化し、若い有情は善なる法へ大いなる精進をし、それによって優位を達し、善行は退転せず、まったく退転せず、そして退転することがなくなるような教訓を説いてくださいますように。」

こう言い終えると、尊い人は偉大なる菩薩サルヴァシューラに次のように話した：「サル

ヴァシューラよ、この題目について如来に問うことを思いついたのは良い、とても良い。したがってサルヴァシューラよ、注意深く聞き、心に留めよ。これをそなたに話すことにしよう。」

偉大なるサルヴァシューラは、尊い人へ「おっしゃるままに。」と申し上げた後、尊い人に向かい聴聞した。

尊い人は彼に次のように話した：「サルヴァシューラよ、この地上で即効あるサンガータというダルマパルヤヤがある。このサンガータ　ダルマパルヤヤを聞く者は、その全ての五逆を浄化し、決して無上完全なる悟りから顔をそむけることはなかろう。サルヴァシューラよ、これについて考え、懐疑の心を抱き、このサンガータストラを聞くものが、一人の如来により集積されるほどの功德の山をも積み上げるのであろうかなどと思い巡らすのなら、そのように考えるべきではない。」

「それではどのように考えるべきなのでしょう。」とサルヴァシューラが言う。

尊い人は答える：「サルヴァシューラよ、その者達は、偉人である多くの菩薩達により集積されるほどの功德を積み、同様に多数の如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏陀により集積されるガンジス川の砂粒の数ほどの功德と同量の功德の山を積む。サルヴァシューラよ、このサンガータ　ダルマパルヤヤを聞くものは決して退転することはなかろう。その者達は如来を見てからは、決してそれを見離すことはないであろう。彼らは無上完全なる目覚めにより、完全な悟りを得るであろう。彼らの全てが成就する善法は、邪悪なマーラにより圧倒されることはなかろう。サルヴァシューラよ、このサンガータ　ダルマパルヤヤを聞くものは皆、出生と滅尽を理解するであろう。」

そしてその瞬間に、全ての菩薩は立ち上がり、上衣を肩にかけ、右膝を地につけて、そのことについて尊い人に次のように尋ねた：「尊い人よ、一人の如来が集積する功德はどのくらいなのでしょう。」

尊い人は次のように話した：「血脈の子達よ、それでは一人の仏陀の功德の山の尺度を聞くがよい。それは次のようである：類推するならば、大海を成す一滴の水の数、地上に存在するちりの粒子の数、ガンジス川の砂粒の数ほど、それはすなわち十地に住する菩薩により集積される功德の山に値する。仏陀による功德の山はそれをはるかに卓越する。このサンガータ　ダルマパルヤヤを聞く有情たちについて言えば、彼らが積む功德の山はそれを更に卓越するものとなろう。数え上げてその功德の山の限界を悟ることは不可能である。サルヴァシューラよ、その時、その瞬間にこの言葉を聞き、大いに刺激される者は、計り

知れない功德の山を積むであらう。」

それから偉大なるサルヴァシューラ菩薩は、尊い人へ次のように言った：「尊い人よ、法を途方もなく渴望する有情とはどのような者でしょうか。」

そう言うと、尊い人は偉大なるサルヴァシューラ菩薩に次のように話した：「サルヴァシューラよ、途方もなく渴望する有情は二者である。それらの二者とはどのような者達であるか。サルヴァシューラよ、彼らは次のようである：一方は全ての有情に対し平等心を持つ。もう一方は、サルヴァシューラよ、法を聞き、それを完全な形で全ての有情に平等に示す者である。」

偉大なるサルヴァシューラ菩薩は言った：「尊い人よ、法を聞き、それを完全な形で全ての有情に平等に示すのは誰ですか。」

尊い人は話す：「サルヴァシューラよ、法を聞いた者は、自身を覚醒（の道）へ捧げる。全ての有情のために自身を覚醒へ捧げる時はいつでも法に渴望するものである。サルヴァシューラよ、もう一方は大乘に入る者達全てである；その者達もまた常に法を渴望している。」

それから百万の神々、竜王、人間そして神女童達が立ち上がり、尊い人へ向かって合掌し、次のように言った：「尊い人よ、我々もまた法を渴望しておりますゆえに、どうか我々と全ての有情の願いを完全に満たしてくださいように。」

その時、その瞬間に尊い人は微笑みを見せた。

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラが立ち上がり、尊い人へ向かって合掌し、礼拝した。彼は尊い人へ次のように話しかけた：「あなた様が微笑むその原因とその条件は何でしょうか。」

それから尊い人は偉大なる菩薩サルヴァシューラに話した：「サルヴァシューラよ、ここへ出向いた有情は皆、無上完全なる覚醒により完全な悟りを得るであらう。彼らは如来の体験を全て完全に成就することであらう。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは言った：「尊い人よ、どの原因により、またどの条件によって、ここへ出向いた有情は無上完全なる覚醒において完全に悟るのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、如来にそのことについて尋ねたことは良い、とても良い。したがってサルヴァシューラよ、回向の特質について聞きなさい：

「サルヴァシューラよ、遠い昔、無数阿僧祇劫（過去莊嚴劫）さかのぼった時に、知識と善行を備え、至福を得た世界の知者、鎮められるべき者達の無上の舵手、神々と人間達の教師、仏陀、聖なる者であるラトナシュリという如来、阿羅漢、完全なる悟りを得た仏陀が世界に現れた。

「サルヴァシューラよ、その頃、その瞬間に、我はバラモンの青年であった。私が仏の智慧へと導いていた全ての有情はその頃、野獣であった。その時、その瞬間に、我は次の祈りを捧げた：{今苦しみに悩んでいる全ての野獣が、私の仏浄土に生まれ変わりますように。また彼らは、我により仏の智慧へと導かれますように。} そしてそれら全ての野獣たちはその言葉を聞き {そうありますことを} と言って同意した。」

「サルヴァシューラよ、したがってこの功德の因によりこれらの有情達はここに至った。彼らは無上完全な目覚めによって完全な悟りを得るであろう。」

仏陀からこのとても喜ばしいことを聞いたすぐ後に、偉大なる菩薩サルヴァシューラは次のように尊い人に申し上げた：「尊い人よ、それらの有情の寿命はどれくらいにまでなり得るのでしょうか。」

尊い人は話した：「それら有情の寿命は八万阿僧祇劫ともなり得る。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは「尊い人よ、一阿僧祇劫とはどのくらいなのでしょうか。」と言った。

尊い人は話した：「血脈の子よ、聞くがよい。それは次のようである。類推するならば、ある男が円周約十二ヨジャナ、高さが三ヨジャナとなる囲いを立てるとして、その囲いは胡麻粒のみで完全に埋め尽くされているとしよう。それから百年が経過し、その男は完全に胡麻粒で埋め尽くされている囲いから一粒の胡麻を取り出す。そのような方法で、彼がそれら全ての胡麻粒を取り尽くしたときも、そしてその囲いの基盤や土台がもはや存在しなくなった時でさえ、いまだ一阿僧祇劫は経過してはいないであろう。

「更に、サルヴァシューラよ、次のように続く。類推するならば、奥行きが五十ヨジャナで高さが十二ヨジャナの山があったとする。それからある男がその山脇に家を建て、長い間をかけ、百年が経つごとに彼はその山を絹の布で一回なでるとしよう。そのようにし

て山は消耗されたとしたも、いまだ一阿僧祇劫は経過してはいないであろう。

「サルヴァシューラよ、そのようなものが一阿僧祇劫の長さである。」

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラは立ち上がり、尊い人に話しかけた：「尊い人よ、一度の回向でさえ、八万阿僧祇劫の幸せな寿命をもたらすほど多量の功德の山を生ずるのでしたら、如来の教えを大いに崇める者いたっては、言うまでもないではありませんか。」

尊い人は話した：「血脈の子孫よ、聞くがよい。サンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞くもの誰もが、八万四千阿僧祇劫の天寿を全うすることができるなら、サンガータスートラを書き出すもの、そしてそれを読むものに至っては言うまでもなからう。サルヴァシューラよ、その者は莫大な功德の山を生ずるのであろう。」

「サルヴァシューラよ、信心とともにサンガータスートラに心から礼拝する者は皆、九十九阿僧祇劫まで遡った自身の前世を覚えることであろう。その者は、六十阿僧祇劫の間、転輪の王とならう。今生にでさえ、皆に好かれることであろう。サルヴァシューラよ、その者は武器により死に追いやられることはないであろう。毒により死に追いやられることはないであろう。悪魔術により害されることはないであろう。死に際にも、その者は九千九百万の仏陀を直に見るであろうし、そしてサルヴァシューラよ、それらの仏陀、聖なる者たちは彼に次のように告げるであろう：{聖人よ、偉大なるサンガータスートラ ダルマパルヤヤが詳細に渡り説かれ、あなたはそれを聞いたために、この功德の山が生じた。}と。そしてそれら九千九百万の仏陀、尊者達は、彼が悟る場をも予言するであろう。」

「サルヴァシューラよ、この偉大なるサンガータスートラ ダルマパルヤヤを、完全に奥義を、最後まで聞くものにいたっては言うまでもないのではないか。したがって、彼らはその者に {恐れることはない} と言って安息を与えることであろう。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは、次のように尊い人に言った：「私も偉大なるサンガータスートラ ダルマパルヤヤを聴聞いたします；そうしたら、尊い人よ、私はどんな功德の山を生ずるのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、それらの有情達もまた、多くの仏、如来により集積されるガンジス川の砂粒の数ほどの功德の山を生じるであろう。」

それから彼は「尊い人よ、私はこの偉大なるサンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞き足りません。」と言った。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、法の教えを聞き足りないことは良い、とても良いことだ。サルヴァシューラよ、我も法の教えを聞き足りない。したがってサルヴァシューラよ、衆生にいたっては言うまでもないのではないか。サルヴァシューラよ、大乘へ信心を起こした血脈の子孫は皆、一千阿僧祇劫の間、不運とは無縁となる；五千阿僧祇劫の間、畜生として生まれることはない；一万二千阿僧祇劫の間、悪意を抱くことがない；一万八千阿僧祇劫の間、へき地に生まれることがない；二万阿僧祇劫の間、法の発起主となる；二万五千阿僧祇劫の間、神々の世界に生まれる；三万五千阿僧祇劫の間、独身を通す；四万阿僧祇劫の間、世帯主の生き方を放棄する；五万阿僧祇劫の間、法を維持する；六万五千阿僧祇劫の間、前世の記憶において瞑想するであろう。」

「サルヴァシューラよ、血脈の子孫には僅かな悪業でさえ生じることはない。邪悪なマールは、彼らに害を及ぼす機会を見つけ出せないであろう。彼らは母体の子宮から生まれることは決してない。サルヴァシューラよ、このサンガータ ダルマパルヤヤを聞くものは誰でも、どこに生まれようとも、九十五無数阿僧祇劫の間、悪趣に陥ることはない。八千阿僧祇劫の間、聞いたことを維持するであろう。一千阿僧祇劫の間、殺生を放棄するであろう。九万九千阿僧祇劫の間、虚偽を放棄するであろう。一万三千阿僧祇劫の間、中傷を放棄するであろう。」

「サルヴァシューラよ、このダルマパルヤヤを聞いた者を見つけ出すのは容易ではない。」

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラは立ち上がり、上衣を肩に掛け、右ひざを地につけ、尊い人へ向かい合掌をし、次のように話しかけた「尊い人よ、このダルマパルヤヤを放棄する者は皆、どのような膨大な悪業の山を生ずるのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、それは多大である。」

彼は言った「尊い人よ、それらの有情が生み出す悪業の山はどれほど大きいのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、静かに。声を静かに。我に全ての悪業の山について聞くものではない。サルヴァシューラよ、ガンジス川が十二本あるとし、その砂粒の数ほどの如来、阿羅漢、完全なる仏陀に対し悪意を抱くことと比べ、サンガーターストラを軽蔑するのは、それよりも遥かに膨大な不善を生ずる。サルヴァシューラよ、大乘に対し悪意を抱く者もまた、それより遥かに膨大な不善を生ずる。サルヴァシューラよ、それ

らの有情は焼かれる。彼らはまさに焼かれるのだ。

サルヴァシューラは尋ねた：「尊い人よ、それらの有情は解脱することができないのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、そういうことだ。彼らは解脱できない。」

「サルヴァシューラよ、それは次のようである。類推すると、誰かしらの頭が切断されたとして、別の者が彼らの頭に湿布として蜂蜜や砂糖、バターや薬用湿布などを塗って貼ったとする。サルヴァシューラよ、これについてどう思うか。この者はまた生き返ることができるであろうか。」

サルヴァシューラは：「尊い人よ、それはできません。」と言った。

尊い人は話した：「更にサルヴァシューラよ、またもう一人の別の男がいるとする。その男が他の有情を尖った武器で射抜いて、彼が有情を殺せないとしても、サルヴァシューラよ、傷ができることであろう。もし薬が適用されたら有情の傷は癒されることであろう。意識が戻ったとき、苦しみを思い出してその有情は〔やっとわかった。私はこれから先、絶対に罪深き悪業を犯しはしない。〕と思うであろう。サルヴァシューラよ、このように反省し、苦しみを思い出すときに彼は完全に罪を放棄するのである。そのとき、彼は全ての法を悟るであろう。全ての法を悟る頃、彼は全ての善法を完成させるであろう。」

「サルヴァシューラよ、それは次のようである：類推すると、死んだ男の両親は嘆き悲しんでも、彼を守る手立てはない。それと同じようにサルヴァシューラよ、各々の衆生は自身や他を救済することはできない。望みの絶たれたその両親のように、これらの有情も死に際に望みが断たれるのである。」

「サルヴァシューラよ、望みの絶たれた有情とは二者である。それらは何者であるか。彼らは次のようである。一人は悪業を犯すか、又は犯したことがある者。もう一人は聖なる法を放棄する者である。これら二者の有情は死に際に望みが断たれる。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは言った：「尊い人よ、それら有情はどのような転生を迎えるのでしょうか。彼らの来世には何があるのでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、法を軽蔑する有情の輪廻には終わりが無い。彼らの来世には終わりが無い。サルヴァシューラよ、法を放棄する有情は、有情の大泣き地

獄にて一阿僧祇劫の間その感覚を経験するであろう；一阿僧祇劫を潰し地獄、一阿僧祇劫を熱地獄、一阿僧祇劫を灼熱地獄、一阿僧祇劫を有情黒線大地獄、一阿僧祇劫を阿鼻地獄、一阿僧祇劫を髮立ちと呼ばれる有情の大地獄へ、一阿僧祇劫を「キイフ」と呼ばれる有情の大地獄へ、そしてサルヴァシューラよ、彼らはそれら有情の八大地獄で八阿僧祇劫もの間、苦しみを経験せざるを得ない。」

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラは次のように言った：「尊い人よ、それは苦しい。至福の人よ、それは正に苦しみです。聞くに堪えられません。」

そしてそのとき尊い人は次のような詩節を詠んだ：

「なんという、
地獄衆の苦体験、
そのすさまじく恐ろしい知らせに
そなたは聞くに堪えられないと見える。

善業為す者 至福を生ずる。
悪業為す者 ただ苦しみと化す。

幸福の因を知らない者は、
輪廻に生まれ 更なる苦しみ
死の苦悩と悲嘆の束縛。
仏陀を無上と思い出す者
それらの賢者は幸福である。

また大乘に信心を持つ者
三悪趣へは陥らず。
サルヴァシューラよ、このように
前業にかきたてられ
その小さな行為でもってさえ
無限の果を享受するであろう。
仏の浄土、無上の浄土に
一つの種を蒔くのなら、その果は偉大となろう。
少しの種を蒔くだけで、
大いなる果を享受するごとく、
克服者の教えに喜びを覚える者、

それら巧妙なる者は幸福である。
悪業が放棄され、
善業も大に行なう。
私の教えへの布施として、
ただ一髪さえ捧げる者は皆
八千阿僧祇劫もの間
豊富な財産と富をも得る；
どこに生を受けようとも、
彼らはいつでも寛大であろう。
そのように仏陀、布施の深遠なる処は、
多大なる果をもたらす。

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラは、尊い人に次のように言った「尊い人により説かれた法がどうして悪となりえましょうか。尊い人よ、サンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞いた後に、しっかりと維持されるべきその根本善とはどのようなものでありましょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、このサンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞いた者の功德の山は、ガンジス川十二本分の砂粒の数ほどの如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏達が幸福にあるために必要なものを、全て揃えて崇拝する者と同等と心得るべきである。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは、「尊い人よ、完成されるべき根本善とはどのようなものでありましょうか。」と言う。

彼がそう尋ねると、尊い人は偉大なる菩薩サルヴァシューラに次のように話した：「これらの根本善は、一如来と同等であると理解されるべきである。」

「如来と同等であるこれら根本善とは何でありましょう。」

尊い人は話した：「法の解説者は、如来と同等であると理解されるべきである。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは、「尊い人よ、法の解説者とは誰でしょうか。」と言った。

尊い人は「サンガータスートラを唱える誰もが、その法の解説者である。」と話した。

偉大なる菩薩サルヴァシューラは言った：「サンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞く者でさえそのような功德の山を生ずるのでしたら、それを書き出す者や、読む者に至っては言うまでもないではありませんか。彼らが生み出す功德の山はどれほどでしょうか。」

尊い人は次のように話した：「サルヴァシューラよ、聞くがよい。それは次のようである。類推すると、四方それぞれに、ガンジス川十二本分の砂粒の数ほどの如来、阿羅漢、完全なる仏陀が、十二阿僧祇劫の間とどまり、法を説いても、サンガータスートラを書き出す者の功德の山の終わりを悟ることやそれを言葉で表現することは不可能であろう。ガンジス川四十八本分の砂粒の数ほどの聖なる仏達でさえも、それを書き出す者の功德の山を表現することは不可能であり、それを書いたり、それについて熟考したり、唱えたりする者達については、その誰もが法の宝典となることは言うまでもないのではないか。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは「それを唱える者の功德の山はどれほどでしょうか。」と言った。

そしてその時、尊い人は次の詩節を詠んだ：

ただ四行の詩節を読んだだけの
その者の善業は
ガンジス川四十八本分の砂粒の数ほどの
克服者達の善業と同等であるがため、
それを読む者の功德を休みなく
表わそうとも、
表わしきれない。
仏達により説かれた法は
見つけがたく果てしない。

そしてまた、その時その瞬間、八百四十億もの神々が、サンガータスートラ ダルマパルヤヤの説かれた方向に向かい合掌して敬意を表わし、尊い人に言った：「尊い人よ、あなた様はこのような法の宝典を、どのような目的であろうともこの地上に据えられたことは良いことです。とても良いことです。」

更に百八十億ものジャイナ苦行者達が、尊い人の居られた場所に到着し、次のように尊い人に言った：「おお、苦行者ゴウタマよ、あなたに栄光あれ！」

尊い人は話した：「如来は常に栄光にある。おお、裸の過剰主義者よ、おまえ達のような過剰主義者がどうして栄光にあらうか。」

彼らは「栄光あれ！苦行者ゴウタマに栄光あれ！」

尊い人は「おまえ達の中に勝者を見ない。」

不正に住し、
どうして勝者となり得よう。
裸の者達、聞くがよい、そして
おまえ達に有益なることを表わそう。
子供じみた精神に快適さなし。
おまえ達がどうして勝者となり得よう。
それゆえに、仏眼によって
とかれるべき者達すべてに
我は深遠なる道も教えよう。

そしてそれらのジャイナ信者たちは、尊い人への怒りから不信の心を生じた。そのとき、その瞬間に神々の君主であるインドラが稲妻を振りかざしたので、百八十億のジャイナ苦行者は恐れおののき、非常な苦しみのために絶望し、涙を流してすすり泣いた。そして尊い人も御身を隠してしまった。それからジャイナ苦行者は、涙でいっぱい顔ですすり泣き、尊い人を見つけられずに次の詩節を詠んだ：

今では我々を保護する人なし、
父や母でさえ、もういない。
それは荒野の如くと見なす：
空家も宿もない。
ここは水もなし
木もなし、鳥もいない。
ここには生き物は見当たらない。
保護者なしには苦しみを感ずる。
如来を見られずに
ただならぬ非常な苦しみを体験する。

それからまたそのとき百八十億人のジャイナ苦行者達が立ち上がり、両ひざを地に付

け、声を上げて歌い上げた：

如来、慈悲深き人よ、
完全なる仏陀、人間の中の無上の人よ、
我々に恩恵をお与え下さい。
絶望する者達への帰依の拠り所となってください。

それから尊い人は微笑を見せ、偉大なる菩薩サルヴァシューラに話した：
「サルヴァシューラよ、裸の過剰主義者達のもとへ行き、法を説きなさい。」

そういわれると、偉大なる菩薩サルヴァシューラは次のように尊い人に言った：
「尊い人よ、黒山がその頂上の岩を取り崩して山々の王、須弥山に敬意を表すなら、
どうやってこの私が如来の御前で法を説きましょうか。」

尊い人は話した：「静かに。血脈の子サルヴァシューラよ、仏達のどのような方便をつかっても、十方世界を見渡し、如来が出現しており、座台が据えてある所を見つけに行くが良い。そしてサルヴァシューラよ、我自身が他の者達、その裸の過剰主義者たちに法を説こう。」

サルヴァシューラ菩薩は言った：「尊い人よ、私自身の威神力によるか、如来の加持力によるか、誰の力によってそこへ行ったら良いでしょうか。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、自分の威神力の恵みにより行くがよい。そしてサルヴァシューラよ、如来の加持力により戻ってくるがよい。」

そしてサルヴァシューラ菩薩は立ち上がり、尊い人を周縁し、その場から見えなくなった。それから尊い人は他の者達、それら裸の過剰主義者たちに法を説いた：「友よ、誕生は苦である。誕生それ自体が苦しみである。生を得ることにより、苦しみへの大いなる恐怖が生じる。生を得ることにより、病への恐怖が生じる。病から老いへの恐怖が生じる。老いから死への恐怖が生じる。」

「尊い人よ、[誕生から、生まれることへの恐怖が生じる] とは何を言っているのでしょうか。」

「人間として生まれると、大いなる恐怖が生じる。王への恐怖が生じる。盗人への恐怖が生じる。火への恐怖が生じる。毒への恐怖が生じる。風への恐怖が生じる。竜巻への

恐怖が生じる。為した業への恐怖が生じる。」

尊い人は、誕生の題目のような多くの相において法を説き、そしてその時、その瞬間に他の者達、それら裸の過剰主義者達は完全に恐れおののき「この先我々は絶対に誕生を望みません。」と言った。

尊い人が、このサンガータスートラ ダルマパルヤヤを他の者達に説いたとき、それら百八十億の裸の過剰主義者は無上完全の悟りを完成した。彼自身の従者からも、一万八千の菩薩が第十地に住しており、彼らもすべての者達が様々な化身を現した：あるものは馬の形、象の形、虎の形、ガルーダの形、須弥山の形、スワスティカのような形、そしてある者は木の形を表わして見せた。彼らはまたすべて蓮華座の上に座禅を組んでいた。

九十億の菩薩が尊い人の右側に座った。九十億の菩薩が尊い人の左側に座り、そして尊い人はその間ずっと瞑想の禅定のままで、方便により法を説いているかのように現れた。七日目になり尊い人は一方の手のひらを伸ばし、偉大なる菩薩サルヴァシューラが無上蓮華界からそこへ来ることを悟っていた。

偉大なる菩薩サルヴァシューラは、彼自身の威神力の恵みにより様々な場所へ赴き、パモッタラ（無上蓮華）の世界へたどり着くのに七日間を要した。尊い人が手のひらを伸ばしたその時、サルヴァシューラ菩薩は尊い人のもとにいた。尊い人を三度周縁したあと、心が尊い人への信頼に奮い立たされ、尊い人のいる方向へ合掌し次のように彼に言った：「尊い人よ、私はすべての十方世界へ行ってから、尊い人よ、私の威神力のうちの一つでもって九百九十億の浄土、そして二つの威神力により百億の尊い人を見て、そして七日目には無上蓮華界に行きましたし、その途中には何億何千万もの不動浄土を見ました。」

「尊い人よ、それから聖なる仏達は応化身を現し、九百二十億の浄土において尊い人達が法を説いています。そしてちょうどその日に、私は八百億の浄土にて八百億の如来、阿羅漢、完全なる仏陀が世界に生じるのを見ました。それらすべての尊い人たちに礼拝し、先へ進みました。」

「尊い人よ、ちょうどその日に、私は三百九十億の仏浄土を通り過ぎ、そしてそれら三百九十億の浄土には三百九十億の菩薩が生まれ、その日のうちに彼らはすべて無上完全なる悟りにおいて完全に悟りを開かれました。私はそれら尊い人たち、如来、阿羅漢、完全なる仏陀を三度周縁してから威神力により姿を消しました。」

「尊い人よ、私は六千万の浄土において尊い仏達を見ました。尊い人よ、私はそれら

の浄土と聖なる仏達に礼拝し、引き続き先へ行きました。」

「尊い人よ、その他の八千の浄土においては如来達が涅槃への入滅を示しておられました。それら尊い方々にも礼拝し、先へ続きました。」

「その上、尊い人よ、九千五百万の浄土にて聖なる法が消滅するのを見ました。私は悲しみのあまりに涙があふれました。その上、私は欲界の神々、竜、夜叉、ラクシャ、そして多数の化身達が、非常な苦悶の痛みにすすり泣くのを見ました。それから同様に、尊い人よ、大海と須弥山と大地のある浄土に行くとそれらは完全に焼かれておりまして、私はそれに礼拝し、そして絶望に陥り、そこを立ち去りました。」

「尊い人よ、私はパドモッタラ界に来る途中で、尊い人よ、私は五億数千万の台座が据えられているのを見ました。南方には一千億の台座が据えられています；北方には一千億の台座が据えられています；東方には一千億の台座が据えられています；西方には一千億の台座が据えられています；上方には一千億の台座が据えられています。尊い人よ、それらの台座はまた、七種の貴宝だけでできております。そしてこれらすべての台座にも如来がお座りになり法を説かれております。私はそれら尊い方々に驚嘆し、それからそれらの如来に尋ねました{この仏界の名は何いうのでしょうか。}そしてこれらの尊い方々は{血脈の子よ、この世界はパドモッタラと呼ばれる。}とお話くださいました。」

「尊い人よ、そしてそれらの如来を周縁した後に、私は{この浄土の如来は何と呼ばれるのでしょうか。}と尋ねました。」

「彼らは{如来、阿羅漢、完全なる仏陀パドマガルバ<蓮華の真髓>と呼ばれるものがこの浄土で仏陀の活動を行なっている}とお話になりました。」

「それから私は彼らに{ここには何億何千万もの仏達がいらっしや、私は如来、阿羅漢、完全なる仏陀パドマガルバにお目にかかったことがないので、どちらがそのお方なののでしょうか。}と問いました。」

「その尊い人は：{血脈の子よ、私が如来、阿羅漢、完全なる仏陀パドマガルバを示そう。}とお話になりました。」

それからそれらすべての如来の御身が消えたかと思いきや、彼らは菩薩のお姿としてのみに現存しておられました。お一人の如来が離れておられましたので、私は頭を地につけ、その如来のお足に礼拝いたしました。私がそこへ行くと台座が建ちあがりましてので

その台座へと向かいました。そして尊い人よ、その時たくさんさんの台座が建ちあがりましたが、誰もそれらの台座へ行く者を見ませんでしたので、如来に申しあげました：{尊い人よ、それらの台座の上に誰一人の有情も見当たりません}。」

その如来は話しました：「根本善を生じなかった有情は、それらの台座にすわる力が無い。」

「私は{尊い人よ、どのような根本善によればそれらの台座に行くのでしょうか。}と 言った。」

その如来は話しました：「血脈の子よ、聞くがよい。サンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞いた有情は、その根本善によりこれらの台座に座るであろうし、それを書き出したり、読んだりした者達に及んでは言うまでもなからう。サルヴァシューラよ、おまえはサンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞いたためにこの台座に座っているのだ。そうでなければ、どうやってこの浄土に入ったことであろうか！」

「尊い人がこのように話したので、私は次のように彼に申しあげました：{尊い人よ、サンガータスートラ ダルマパルヤヤを聞いた者が生み出す功德の山はどれくらいなのでしょう。}。」

「それから尊い人如来パドマガルバは微笑みをお見せになりました。私はその尊い人にどのような目的で微笑みを見せたのかをお尋ねしました：{尊い人よ、そのような理由で、またどんな目的で如来は微笑をお見せになったのでしょうか。}。」

「その尊い人はお話になりました：{血脈の子、偉大なる菩薩サルヴァシューラ、偉大なる力を成就した者よ、聞くがよい。それは次のようである：類推すると、ある者が四つの国を支配する転輪の王であるとする。もし彼が四つの国の土地に胡麻の種を蒔いたとしたら、サルヴァシューラよ、たくさんさんの種の芽が出ると思うか。} と。」

サルヴァシューラは「尊い人よ、たくさんです。至福の人よ、たくさん出ます。」

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、ある有情がその胡麻粒をあつめて一つの山盛りをつくるとしよう。そしてもう一人別のものがその山盛りから一粒ずつ取り分けたとする。サルヴァシューラよ、どう思うか。その有情はそれらの胡麻粒を数え上げたり、分析したりすることができるであろうか。」

偉大なる菩薩サルヴァシューラは言った：「尊い人よ、それはできないでしょう。至福の人よ、そうすることはないでしょう。彼には、それら胡麻粒を数え上げることや分析することはできないでしょう。」

「おなじようにサルヴァシューラよ、如来をおいては他に、このサンガーターストラダルマパルヤヤの功德の山を分析できる者はいない。」

「サルヴァシューラよ、それは次のようである：類推すると、その胡麻粒の数ほどの如来全員がサンガーターストラダルマパルヤヤを聞くことから生じる功德の山を示したとしても、類推によってさえその功德が尽きることはないであろう。それを書いたり唱えたり、書き下ろした者に及んでは言うまでもない。」

偉大なるサルヴァシューラ菩薩は言った：「これを書くことによってどのような功德の山を生ずるのでしょうか。」

尊い人は話した：「血脈の子よ、聞くがよい。ある者が数百万世界にあるすべての草木を指の大きさほど小さく切ることのようであり、そしてサルヴァシューラよ、もう二つの類推を聞くがよい。数百万世界に存在するすべての石や絶壁、土や埃の分子の数ほどが四国を支配する転輪の王となったとすると、彼らの功德を類推することはできるだろうか。」

サルヴァシューラは「尊い人よ、それはできません。如来以外においては。」といった。

「サルヴァシューラよ、同様に、サンガーターストラダルマパルヤヤを書くことの功德の山を類推することも不可能である。それだけ多くの転輪の王による功德の山に比べ、このダルマパルヤヤのただ一字だけでも書いた者の功德の山は、それよりもっと大きい功德の山を生ずる。彼らの功德はとても大きいけれど、それらの転輪の王はそのようではない。サルヴァシューラよ、このように、大乘の聖なる法を保持し、修行に住する偉大なる菩薩は、転輪の王に劣ることはない。このように、サンガーターストラダルマパルヤヤを書き出すことによる功德の山の類推はできない。サルヴァシューラよ、このサンガーターストラは、功德の宝を明かす。これはすべての迷いの沈静剤である。それは全ての法の光明の灯火を輝かせる。それはすべての悪魔を打ち負かす。それはすべての菩薩の居所を光り輝かせる。それはすべての法の成就を完成する。」

彼がこのように話すと、偉大なる菩薩サルヴァシューラは次のように言った：「尊い人よ、現世での不婬は大変難しい修行です。何がその理由かと思えますと、尊い人よ、如来の修行が稀有であるように、不婬の修行もまた稀有なのであります。不婬の修行に従事す

るとき、その者は尊い人を直接見ることでしょう。日夜、四六時中尊い人を見るでしょう。そして尊い人を直接、日夜、四六時中見るときに、その者は浄土を見ます。その者は、浄土を見るときに、すべての宝を見るのです。死に際には、恐怖は生じないでしょう。それから悲しみに暮れることもないでしょう。その者は渴望の罣に縛られることはないでしょう。」

彼がそう言うと、尊い人は偉大なる菩薩サルヴァシューラに「如来の到来は見つけがたい。」と話した。

彼は「尊い人よ、見つけ難い。至福の人よ、それは見つけ難いです。」といった。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、そのように、このサンガータスートラ ダルマパルヤヤも見つけ難いのだ。このサンガータ ダルマパルヤヤが耳に入ったものは、八十阿僧祇劫の間、前世を覚えることであろう。六万阿僧祇劫の間、転輪の王位を得るであろう。八千阿僧祇劫の間、インドラの地位を獲得することであろう。二万阿僧祇劫の間、神々の清らかな住処に生まれるのと同等の幸運を受けるであろう。三万八千阿僧祇劫の間、偉大なるブラフマーとなるであろう。九万九千阿僧祇劫の間、悪い転生を迎えることはなかろう。十万阿僧祇劫の間、餓鬼の中に生まれることはなかろう。二万八千阿僧祇劫の間、畜生の中に生まれる子とはなかろう。一万三千阿僧祇劫の間、阿修羅の世界に生まれることはなかろう。彼らの死が武器によってもたらされることはなかろう。二万五千阿僧祇劫の間、彼らの智慧が歪むことはなかろう。七千阿僧祇劫の間、彼らは聡明であろう。九千阿僧祇劫の間、彼らは美形で魅力的であると見なされるであろう。ちょうど如来の色身が成就された如く、その者もそのようになるであろう。二万五千阿僧祇劫の間、女々しい者の中に生まれることはなかろう。一万六千阿僧祇劫の間、身体的な病に見舞われることはなかろう。三万五千阿僧祇劫の間、神通眼を持つであろう。一万九千阿僧祇劫の間、竜の生地に生まれることはなかろう。六万阿僧祇劫の間、怒りに狂うことはなかろう。七千阿僧祇劫の間、貧困に生まれることはなかろう。八万阿僧祇劫の間、二つの大陸上に生活するであろう。貧困に生まれたとしても、彼らは次のような快樂を得るであろう：一万二千阿僧祇劫の間、盲目者の生地に生まれることはなかろう。一万三千阿僧祇劫の間、三悪趣の世界に生まれることはなかろう。一万一千阿僧祇劫の間、彼らは忍辱を教える聖人となる。」

「また死の時点で、最後の意識が消滅するときに、彼らは間違った知覚をもつことがなかろう。怒りに狂うことはなかろう。東方には、ガンジス川十二本分の砂粒の数ほどたくさんのおん達、尊い人を見るであろう。南方には、ガンジス川二千本分の砂粒の数ほどたくさんのおん達を直接見るであろう。西方には、ガンジス川二十五本分の砂粒の数ほ

どたくさんの聖なる仏達を見るであろう。北方には、ガンジス川八十本分の砂粒の数ほどたくさんの聖なる仏達を直接見るであろう。上方には、九千万の聖なる仏達を直に見るであろう。下方には、ガンジス川八千万本分の砂粒の数ほどたくさんの聖なる仏達を見るであろうし、その血脈の子に向けてそれらの仏達は「血脈の子よ、御前はサンガータ ダルマパルヤヤを聞いたので、これから先の来世には良い性質と恩恵、そしてこの種の幸福を得るであろうから恐れることはない。」と言って安息を与えるであろう。

「おお、血脈の子よ、ガンジス川数千数億数千万本分の砂粒の数ほどたくさんの如来を見たことがあるか。」という。

「尊い人よ、見ました。至福の人よ、私は見ました。」

「おお、血脈の子よ、それらの如来はあなたを見に来たのだ。」という。

「どのような善業を為してこのたくさんの如来が私のいる所に来たのでしょうか。」

「血脈の子よ、聞くがよい。おまえは人間の体を得、そしてサンガータ ダルマパルヤヤが耳に入ったために、この大いなる功德の山が生じたのである。」という。

「尊い人よ、私の功德がこれまでもなるのでしたら、それを最後まで完全に聞いた者に及んでは言うまでもないではありませんか！」という。

「静かに。静かに。おお、血脈の子よ、四行の詩節の功德を述べよう；したがって聞くがよい。血脈の子よ、それは次のようである：類推すると、ガンジス川十三本分の砂粒の数ほど多くの如来、阿羅漢、完全なる仏陀の功德の山と比べても、それはそれよりもっと大きな功德の山を生ずるのである。ガンジス川十三本分の砂粒の数ほど多くの如来、阿羅漢、完全なる仏陀を崇拝する者と比べても、このサンガータ ダルマパルヤヤの詩節を四行聞くのなら、その者はそれよりもっと大きな功德の山を生ずるのであり、それを最後まで完全に聞く者に及んでは言うまでもないのではないか。血脈の子よ、サンガータ ダルマパルヤヤを最後まで完全に聞く者について聞くがよい。数百万の世界すべてに胡麻の種を植える者がいるとして、その胡麻の種と同じ数ほどの転輪の王がいたとする、そしてたくさんの富と莫大な所持品を持つお金持ちがそこからそれらの転輪の王達に布施をしたとする—それと比べると、一人の預流入に布施をする者はもっと大きな功德の山を生じる。もしその数百万の世界にいるすべての有情が預流入となり、それらすべてにお布施をする者の功德の山と比べても、一人の一来向に布施をする者の功德の山はもっと大きい。もし数百万の世界すべての有情が一来向だとして、それらすべてに布施をするものの功德の山

と比べても、一人の不来向に布施をする者が生ずる功德の山はもっと大きい。もし数百万の世界すべての有情が不来向だとして、それらすべてに布施をする者の功德の山と比べても、一人の阿羅漢に布施をする者が生ずる功德の山はもっと大きい。もし数百万の世界すべての有情が阿羅漢だとして、それらすべてに布施をする者の功德の山と比べても、一人の独覚仏に布施をする者が生ずる功德の山はもっと大きい。もし数百万の世界の有情すべてが独覚仏だとして、彼らすべてに布施をする者の功德の山と比べても、一人の菩薩に布施をする者が生ずる功德の山はもっと大きい。もし数百万の世界すべての有情が菩薩だとして、彼らすべてに布施をする者の功德の山と比べても、一人の如来に対し、心が信心に奮い立たされたものが生ずる功德の山と、完全に如来で満ちている数百万の世界に対して心を信心で奮い立たす者、そしてこのサンガータ ダルマパルヤヤを聞く者が生ずる功德の山がそれよりもっと大きいのなら、サルヴァシューラよ、このサンガータ ダルマパルヤヤを書き下ろしたり、暗記したり、唱えたり、又は理解する者皆について言う必要があるか！サルヴァシューラよ、このサンガータ ダルマパルヤヤに向かい、心が信心に奮い立たされて礼拝することについてまで言う必要があるか！」

「サルヴァシューラよ、どう思うか。[すべての衆生がこれを聞けるのだろうか。]と疑う者がいるなら、彼はそれを聞いたとしても信心を起こすことはない。」

「サルヴァシューラよ、聞くがよい。衆生の中に大海の底にたどり着くことができる者がいるか。」

「尊い人よ、おりません。」と彼が言った。

「手のひらで、大海の水をすくい切る有情がどこかにいるか。」と彼が話した。

「尊い人よ、おりません、至福の人よ、おりません。」と彼が言った。

彼は話した：「ちょうど大海を干す有情がどこにも存在しないように、サルヴァシューラよ、大志の劣る有情もこのダルマパルヤヤを聞くことができない。サルヴァシューラよ、ガンジス川八十本分の砂粒の数ほど多くの、数百万の如来を見たことのない者達はこのサンガータ ダルマパルヤヤを書き出すことができない。ガンジス川九十本分の砂粒の数ほどの如来を見たことがない者は、このダルマパルヤヤを聞くことができない。無数億の如来を見たことのないものは、このダルマパルヤヤを聞いて、それを拒絶するであろう。サルヴァシューラよ、ガンジス川の砂粒の数ほどいる、一億の如来を見たものは、このダルマパルヤヤを聞いて信心を生ずる。彼らは喜び、真実をありのまま知るであろう。その者はこのサンガータ ダルマパルヤヤに信心を抱き、拒絶することはないであろう。」

「サルヴァシューラよ、聞くがよい。このサンガータスートラからほんの四行書く者達は九百五十億の世界越え、彼らの浄土はまさにスカヴァティ界のようになるであろう。サルヴァシューラよ、その有情は八万四千阿僧祇劫もの寿命を得ることができる。」

「サルヴァシューラよ、聞くがよい。このサンガータ　ダルマパルヤヤからほんの四行を聞く偉大なる菩薩達に関しては、次のようである：類推すると、五逆を犯し、又はその命令を下したり、その行為を賞賛したりするなどの行為を犯した有情が、このサンガータ　ダルマパルヤヤをほんの四行聞いただけで、五逆の悪業を浄化してしまうことのものである。」

「サルヴァシューラよ、聞くがよい、もう一つの特徴を説明しよう。それは次のようである。類推すると：仏塔を破壊し、僧集団に亀裂を生じさせ、菩薩を瞑想の禅定からゆるがせ、仏陀の智慧を害したり人間の命を奪ったりする有情がいる。後になってその有情は後悔し悲しみに暮れる。{この身によって、私は破滅した。次の世でも破滅するだろう。私にはもう価値がない。} と考えて非常な悲しみが起こり、悲嘆の情を味わう。彼は耐えがたい気持ちを経験する。サルヴァシューラよ、その有情はすべての有情たちから拒絶される。彼は嫌われる。この有情は焼かれ、無価値な者となるであろう。世俗と世俗を越えた法も彼には手が届かなくなるであろう。それは丸太が灰になるまで焼かれるように、彼も幾つの阿僧祇劫もの間そのようになるであろう。豪華な家の柱や梁も焼かれれば、もう美しくもなくなるように、その男もそのようになるであろう。この世にあっても彼は美しいことはない。彼はどこへ行ってもまた、行く先々で有情達は彼を批判して殴りかかり、そして彼は飢えと乾きに苦しみ、僅かながらの食べ物や飲み物でさえ見つけることができないであろう。」

「そのために彼は苦しみを味わい、渇きと飢えの原因と暴力を受けるの原因は仏塔の破壊と五逆の業であることを思い出し、そして思い出したために {どこへ行けばよいのだろう。誰が私を守ってくれるのだろうか。} と思い落ち込んで、{ここに私を守ってくれる人は誰一人としていないから、山か峡谷に行つて命を絶とう} と思いつつ彼は言ったのだ：

罪を犯したために
私は焼き殻のように　永遠に焼かれる。
この世界は不快であるように、
次の世界も不快である。
家においても不快である；

外に出ても不快である。
罪は為され、その傷を通して
私は悪趣へ陥る。
この先の来世にも苦しみ
どんな悪状況にも私は住する。
すすり泣き、涙に詰まるので、
神々でさえ彼の言葉が聞こえた：
〔この世の後には望みはない。
ああ、悪趣の世界へ私は行く。〕と。』

「神が彼に言った：

愚か者はそう思うのだ！
この苦しみの心を落として行くがよい！
〔父を殺し、母を殺し、
私は五逆を犯したために
帰依の拠り所も友人も私にはない；
私は苦しみの情を味わうことでしょう。
山頂に行き、
私の体はそこで消えます。〕
〔愚か者よ、行きなさるな。
その心では害になるばかり
あなたは多くの罪を犯した。
その罪深きことをしなさるな。
自身に害を及ぼす者は
苦しみの地獄へと行くであろう。
そのもの悲嘆し、泣き叫び、
そのために大地に落ちてゆく。
その努力では仏にはなれない。
菩薩にもならないであろう。
声聞乗さえ成就されない。
別の努力に励みなさい。
聖人のいるその山へ行きなさい。
そこへ行き聖人の偉大さを見て、
頭を地につけて彼の足に敬意を表しなさい。〕
〔聖なる人よ、私の帰依の拠り所となってください！

私は恐れと悲哀に虐げられている。
真髓の人、聖人よ、私の言葉をお聞きください！
お座りになり、考慮の機会をお与え下さい。
一瞬だけでも善法を説いてください。
私は恐れと悲哀に虐げられておりますので、
どうか一瞬だけでも座って
我が犯した罪を懺悔させてください。
聖人が私に話しかけてくださいますように。

「そして聖人は言った：

〔苦しみに嘆き悲嘆に虐げられ、
あなたは飢えと乾きに侵され、
絶望し、三界を旅している。
したがって、この食物を食べなさい。〕
体を満たすために、その聖人は
食物を与えた。
〔この美味でおいしい食べ物を食べた後には、
喜びを味わうであろう。
それからすべての罪を浄化する法を
我はその後に説こう。〕
彼はおいしいその食べ物をあっという間に食べ、
そして食べ終わってから手を洗い
そして聖人を周縁した。
彼が結跏趺坐を組むと同時に、
侵した罪を話した。
〔父を殺し、母を殺し、そして
仏塔を私は破壊しました。
我は菩薩の仏性成就を妨げました。〕
その男の言葉を聞き、
聖人は次の言葉を話した：
〔罪を犯したので、やれ、
あなたは善人ではない。
犯した悪業や、命じた悪業を懺悔しなさい。〕

「その時、その瞬間、苦闘の痛みが突き刺さり、恐れに虐げられた彼は聖人に言った：

「誰が私を守ってくれるのでしょうか。
我は悪業を犯したために
苦しみの情を味わうことでしょう。」
それから男は両膝を地につけた。
「犯し、命じた全ての悪を
懺悔します。
それらが悪い結果を招きませんように。
苦しみを味わうことがありませんように。
私はあなたのおそばにいますので、
聖人よ、あなたが私の帰依の拠り所となりました。
あなたは後悔することもなく、平静であるゆえに、
私の悪業を静めてください。」

「そしてその時、その瞬間、聖人は男を慰め言った：「その者、我があなたの帰依の拠り所となろう。我があなたの支えとなろう。我があなたの救いとなろう；ゆえに私の存在において恐れることなしに法を聞きなさい。サンガータと呼ばれるダルマパルヤヤを僅かでも聞いたことがあるか。」」

「その者は「全く聞いたことがありません。」と言った。」

「聖人は「慈悲に住し、有情に法を説くものを除いては、誰が焼かれる有情に法を説くのだろうか。」と言った。」

「彼は言った、「血脈の子よ、更に聞きなさい。計り知れない遠い昔、無数の阿僧祇劫遡るそのとき、ヴィマラチャンドラ王と呼ばれる、心得た法王がおられた。血脈の子よ、そのヴィマラチャンドラ王家に一人の息子が生まれた。そのために偉大なるヴィマラチャンドラ王は預言者ブラフマーを集め、彼らに「ブラフマー達よ、この若者にはどのような兆候が見えるか。」と言うに、預言者ブラフマー達は「偉大なる王よ、不吉です。この新生児はよくありません。」と言った。王は「ブラフマーよ、この子はどのような者になるか。」言うと、預言者たちは「王よ、この子は七歳になると父母のお体を危険にさらします。」と言った。それから王は次のように言った：「私の命に障害があっても結構だ。しかし我はこのわが息子を殺したりはしない。稀にも、この世界の人間としての命を成就したのだから、どのような人間の体にもそのような危害を加えることはしない。」そしてその子は素早くぐんぐんと成長した。というのは、生後一ヶ月になると他の子が二年かかるくらいまでも大きく成長した。その後、ヴィマラチャンドラ王は、王自身が蓄積した業のためにこの子が

このように成長したのだと言うことも悟った。それから王は、その子に国王の王権を譲渡し、次のように話した：「おまえが名声のある偉大な王国を持つ王となることを。法と共に正当な統治を；法でないものには依らないことを。」それから王権を譲ってから彼は「王」の称号を授けた。そしてヴィマチャンドラ王は、自身の国の王として活動することはもはやなかった。それから百万の大臣達がヴィマラチャンドラ王のいる所へ赴き、そこへ着くと次のように王に話した：「おお、偉大なる王よ、なぜあなたは今ではご自身の国の王として活動をされないのですか。」そして王は「我は数え切れないほどたくさんの阿僧祇劫の間、王国、富、そして勢力をもつ者として支配をしたが、決して満足したことはなかった。」と言った。そしてその時、その瞬間、その子はあつという間にその父母の命を奪い、そこで五逆の業を蓄積したのである。

「おお、その者、我もまたその王に苦しみの経験が生じた時を覚えている、そして息子は後悔し、すすり泣き、涙に詰まっていたので、我は大慈悲を起こし、そこへ行って法を説き、そして彼がその法を聞いたときにもそれら五逆の業は迅速に、少しも残らず浄化されたのだ。」

「彼は「スートラの王、サンガータ　ダルマパルヤヤを聞くそれらの偉大なる難行者達は、法の無上な源と、すべての悪の浄化、そしてすべての煩惱の浄化を成就するであろう。」と言った。」

法による者は、迅速に解脱するために、
我は説法するべく、ゆえに念入りに聞きなさい。
たった四行の詩節が
一息に説かれるとしたら、
それはすべての悪を浄化するために、
預流を成就するであろう；
その者すべての悪から解脱するであろう。
こう言うと、地獄の恐ろしい束縛から
これらの警句が発せられるとき、
有情は完全に苦しみから解放される。

そしてその座から男は立ち上がり、
そして合掌をすと、
頭を地につけて彼に礼拝した。
彼は「素晴らしい。」と言って満足した。
「素晴らしい」善友よ。

素晴らしいは、偉大な方便、
悪を破壊するサンガータスートラを説く者達だ。
そしてまたそれを聞くものも素晴らしい。」

その後、その時、その瞬間に、上空の真中から一万二千の神童が、合掌して聖人の前に来るや、彼の足に礼拝し、次のように言った：「尊い人よ、あなたの記憶はどのくらいまで遡るのでしょうか。」と。同様に、四百万の竜王が来て、一万八千の夜叉王が来た。聖人に向かい合掌をして尊敬と共に礼拝をすると、次のように言った：「偉大なる人よ、あなたの記憶はどれくらいまで遡るのですか。」聖人は「無数数千数百億の阿僧祇劫までだ。」と言った。

彼らは「この悪業は一瞬のうちにどの善業によって完全に浄化されるのでしょうか。」と言った。

彼は言った：「サンガータスートラを聞くことによる。ここに集まった有情の中から、このダルマパルヤヤを聞くことで信心を抱いたものは皆、無上、完全の悟りを予言されている。五逆を犯した人々は〔サンガータ〕と呼ばれるこのダルマパルヤヤを聞くだけでも一瞬のうちに五逆の業を完全に尽き果たし、それらは完全に浄化されるであろう。無数数千数百億の阿僧祇劫の間、悪趣への扉は閉じられるであろう；神々の世界への三十二の扉が開かれるであろう。このサンガータ　ダルマパルヤヤからたった四行の詩節を聞いただけの者の功德の山がそれほどにもなるのだから、それを尊敬し、崇め、描きだし、花や焼香、香水、宝飾、軟膏、粉薬、法服、天蓋、旗、そして長旗を供養して、シンバルを合わせた後に〔素晴らしい、素晴らしい。〕といて満足し一度だけでも賞賛する者に至ってはいうまでもないのではないか。

それから偉大なる菩薩サルヴァシューラは尊い人に次のように言った：「尊い人よ、サンガータ　ダルマパルヤヤが説かれるときに合掌する者について言えば、合掌をして礼拝するだけでどのような功德の山を生じるのでしょうか。」

尊い人は話した：「血脈の子よ、聞くがよい。五逆を犯し、又はそれを命じ、そしてそれに賛同した者でも、このサンガータ　ダルマパルヤヤからたった四行の詩節を聞いて合掌する者は皆、礼拝をするときに、五逆の悪業が完全に浄化されるのであるなら、サルヴァシューラよ、このサンガータ　ダルマパルヤヤを最後まで理解して聞く者は言うまでもないのではないか。この者は前者よりも更に大きな功德の山を生じる。血脈の子よ、私は、サンガータスートラの意味が理解されるように類推を示そう。サルヴァシューラよ、それは次のようである：類推すると、太陽が昇ることのない竜王安ナヴァタプタの宮殿から五

大川が由来する。ある一人の人間がそれら五大川の水滴を数えるなら、サルヴァシューラよ、それらの水滴を数え上げることは可能であろうか。」

彼は「尊い人よ、それは無理です。」と言った。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、同様に、サンガータ ダルマパルヤヤの根本善を百阿僧祇劫、さらに数千阿僧祇劫の間、数えても数え終えるのは不可能である。サルヴァシューラよ、なぜかと不思議に思うなら、このサンガータ ダルマパルヤヤを一瞬でさえ提唱する者は苦境を請け負うのではないか。」

彼は「尊い人よ、その者は苦境を請け負います。」と言った。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、このサンガータ ダルマパルヤヤを提唱できるであろう者は、それよりもっと大きな苦境を請け負うのである。それは次のようである。類推すると：アナヴァタプタ湖に由来する五大川の水滴を数えても、その終わりを見届けることは不可能である。」

彼は「尊い人よ、それらの五大川とはなんでしょうか。」と言った。

尊い人は話した：「それらはガンジス川、シタ川、ヴァクシュ川、ヤムナ川、そしてチャンドラバーガ川である。これらが大海に流れる五大川である。五大川のそれぞれに五百本の川が沿っている。サルヴァシューラよ、それら五百本の川も、一千本の川を伴って空から流れ、それらによって生物は満たされているのだ。」

彼は「それらの一千本の川を伴う川とは何でしょうか。」と言った。

尊い人は話した：「スダリ川は一千本の支流川を持ち、シャムカ川は一千本の支流川を持ち、ヴァハンティ川は一千本の支流川を持ち、チトラセナ川は一千本の支流川を持ち、ダルマヴィリッタ川は一千本の支流川を持つ。それらの大川はそれぞれ一千本の支流川を持つ。」

それらはこの地球に雨の小川を解き放つ。サルヴァシューラよ、雨粒の小川が流れ着くところにはどこでも花と果実、作物が生じる。この雨の小川が地球上に解き放たれるときに水が生じる。水が生じることで野原や庭園はすべて十分に満たされ、幸福になる。サルヴァシューラよ、それは次のようである。類推をすると：生きとし生ける物の君主は地球全体を幸福にする。同様にサルヴァシューラよ、このサンガータ ダルマパルヤヤは多

くの者の利益と多くの者の幸福のためにこの地球に布告された。三十三の神々の寿命ほど、人間の寿命は長くない。サルヴァシューラよ、三十三の神々とは何かと尋ねるのなら、神々の君主インドラがいる場所が、三十三と呼ばれるところである。サルヴァシューラよ、道義の語に順ずる者も皆そこにおり、彼らの功德の山を類推することはできない。また、妄語に順ずる有情もおり、彼らが地獄や畜生に転生することの類推をすることもまた不可能である。それら地獄と畜生、餓鬼の苦しみを経験する有情には全く帰依の拠り所がない。彼らの望みは断ち切られている；その者達は嘆き、地獄に落ちる；彼らは悪友の支配下にいるはずである。そして道義の語に順ずるそれらの有情とその者達の功德の山を類推することは不可能であり、彼らは善友の支配下にいるはずである。善友を見るときには、如来を見る。如来を見るときには、その者の全ての悪が浄化される。生き物の君主が地上に喜びを興じる時、地上の有情達の幸せを類推することは不可能であろう。」

「サルヴァシューラよ、同様に、このサンガータ ダルマパルヤヤも有情のために仏の活動をするのである。サンガータ ダルマパルヤヤを聞かない者は誰もが無上、完全の悟りにおいて完全な悟りを得ることはできない。彼らは法輪を転ずることができないのだ。彼らは法の鐘を鳴らすことができない。彼らは法の獅子座に座ることができない。彼らは涅槃の世界に入ることができない。無数の光線を輝かせることができない。サルヴァシューラよ、このように、サンガータ ダルマパルヤヤを聞かない者は、悟りの心に座することもできないのである。」

サルヴァシューラは「尊い人よ、ある疑問をお尋ねしてもよろしでしょうか。至福の人よ、疑問があります。」と言った。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、望むままに話なさい、そしておまえの疑問を晴らそう。」

彼は言った：「五逆の業から有情を解放し、その後一人ずつ不來向に導いたその聖人—そのお方は誰でしょうか。」

彼は話した：

仏陀の言葉は巧妙である。
サルヴァシューラよ、よく聞きなさい。
師であるサンガータストラは、
聖人の形をとって現れたのだ。
サンガータはそのやさしさから、

仏の御身を通してでも
法を説く。
ガンジス川には多くの砂粒があるように
それも多くの形をとり法を説く。
それは仏の形をとり法を説く。
それはまさに法の真髓を説く。
仏を見たいと望む者よ、
サンガータは仏と同等である。
サンガータが存在するところにはどこでも
常に仏が存在する。

尊い人は話した：「血脈の子よ、聞くがよい。サルヴァシューラよ、その昔、無数九十九阿僧祇向の昔に、一千二百万の仏達が現れた。ラトノッタマと呼ばれる如来が現れてから後に、我は主要な提供者となり、それらチャンドラと呼ばれる一千二百万の仏達を崇拜した。我は食物、飲料、香水、宝飾、軟膏などの供物と、彼らを喜ばすためには何でも、おいしい食事と快適さに必要なすべてを捧げて仕えた。そのように彼らに仕えたことにより、我は無上完全なる悟りの予言を聞いたことを覚えている。」

「サルヴァシューラよ、我はラトナヴァバサと呼ばれる一千八百万の仏達が現れたことを思い出し、そのときも、我は主要な提供者であって、ガルバセナと呼ばれる一千八百万の仏達を、宝飾、軟膏、飾り、それぞれに似合った華麗な服などでもって崇拜し、そうしたことにより無上、完全なる悟りの予言を聞いたのだ。」

「サルヴァシューラよ、私は二千万の仏達を覚えており、それら一人一人が如来、阿羅漢、完全なる悟りのシキサムバヴァと呼ばれた。」

「サルヴァシューラよ、我は二千万の仏達を覚えており、それら一人一人が如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏陀はカシヤパと呼ばれた。その時にも、主要な提供者としてそれらの如来を香水、宝飾、そして軟膏でもって崇拜し、それから如来への奉仕にふさわしく、恭しい奉仕を供養し、そこでも無上完全なる悟りの予言を成就した。」

「サルヴァシューラよ、ヴィマラプラバサ呼ばれる一千六百万の仏達が現れ、その時我は莫大な富と財産をもつ裕福な家主であった。私のすべての所有物を与え、提供者となって、如来への奉仕にふさわしく、彼らに座布、衣服、香水、宝飾、軟膏、そして毛布の供物と共に敬しく奉仕したちょうどその時に、我は無上完全なる仏陀の予言を成就したのである。このことも覚えてはいるが、その予言の時期と境遇はまだ来ていなかった。」

「サルヴァシューラよ、聞くがよい。九千五百万の仏達が世界に現れ、その全員がシャキヤムニと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏達であった。我はその時、心得た王であり、シャキヤムニと呼ばれる九千五百万の仏達を、香水、宝飾、軟膏、座布、衣服、焼香、旗、長旗と共に崇拝したちょうどその時、我は無上完全なる悟りの予言を成就したのだ。このことは覚えている。」

「サルヴァシューラよ、この世界に九千万のカラクツァンダと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる仏達が現れ、その時我は、多くの富と財産を持つ裕福なブラフマーの青年であった。私のすべての所有物をすべて与え、提供者となってからそれらすべての如来に、香水、宝飾、軟膏、座布、そして衣服でもって崇拝し、それら如来に、それぞれにふさわしく、恭しい奉仕を供養したちょうどその時、我は無上完全なる悟りの予言を成就した。これもまた覚えている。しかしその予言の時期と境遇はまだ来ていなかった。」

「サルヴァシューラよ、この世界に一千八百万の仏達が現れ、その全員が如来、阿羅漢、完全なる仏陀カナカムニと呼ばれた。その時、主要なる提供者となり、我はそれらすべての如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏達を、香水、宝飾、軟膏、座布、そして飾りでもって崇拝した。まさに如来への奉仕にふさわしく、我もまた彼らに奉仕をしたちょうどその時、無上完全なる悟りの予言を成就したことも覚えている。しかしその予言の時期と境遇はまだ来ていなかった。」

「サルヴァシューラよ、この世界に一千三百万の仏達が現れ、彼らは全員が如来、阿羅漢完全なる仏陀アヴァバサシュリと呼ばれた。我はそれらの如来、阿羅漢完全なる悟りの仏達を座布、衣服、香水、宝飾、軟膏、毛布、そして飾りと共に崇拝し、ちょうど如来への奉仕にふさわしく、我もまた彼らに恭しい奉仕を捧げた。そしてそれらの如来が多くの法の序論とその解説や戒律の教訓を説いたちょうどその時にもまた、我は無上完全なる悟りの予言を成就した。これは覚えているが、その時もその予言の時期と境遇は来ていなかった。」

「サルヴァシューラよ、この世界に二千五百万のプシヤと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる仏達が現れた。その時、我は出家者であってそれらの如来を崇拝した。今アナンダが私に奉仕するように、我はそれら如来に奉仕を捧げ、そこで無上完全なる悟りの予言を成就した。これは覚えているがそのときも、予言の時期は来ていなかった。」

「サルヴァシューラよ、この世界に一千二百万のヴィパシュインと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる仏達が現れた。我はそれらの如来、阿羅漢完全なる仏達を、座布、衣服、香水、

宝飾、そして軟膏でもって崇拜した。ちょうど如来への奉仕にふさわしく我もまた、彼らに奉仕した。その時、出家者となり直ちに、無上完全なる悟りの予言を成就したことも覚えていいる。その後まもなく、我は最後に現れたヴィパシュインがこのサンガータ ダルマ パルヤヤを説いたことに気が付き、それからその時、この地上に七種の貴宝の雨が降り注いだ。それでこの地上の有情が貧困とは無縁となり、我はちょうどその時、無上完全なる悟りの予言を成就した。その後長期にわたり、我は予言を受けなかった。」

彼は「その時期、その境遇とは何だったのでしょうか。」といった。

尊い人は話した：「サルヴァシューラよ、聞くがよい。無数阿僧祇劫経った後に、如来、阿羅漢完全なる仏ディパムカラがこの世界に現れ、その時我はメガと言う名のブラフマーの男の子であった。その如来ディパムカラがこの世界に現れた時に、我は、ブラフマーの男の子の姿をとり不婬の修行をしていた。それから如来ディパムカラのお姿を見て、我はウパラの花を七つちりばめ、無上完全なる悟りへと回向し、そしてその如来は我に〔若きブラフマーよ、今から一阿僧祇劫の後、この世界でおまえは、シャキヤムニと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる悟りの仏陀となるであろう。〕といて予言した。」

「サルヴァシューラよ、その後、我は空の真ん中、十二パルミラの高さの所に座り、非生起の現象に関する忍の状態を成就した。我が無数阿僧祇劫の間不婬を修行し、完成を維持していたときからのすべての根本善を直接、昨日今日のことのように覚えている。そしてその後も、サルヴァシューラよ、我が、無数数千数百億の有情をそれぞれ善法へ導いたのなら、サルヴァシューラよ、無上完全なる悟りにおいて、直接完全に覚醒した今、我がすべての有情を利益したいと願っているということをごここで言う必要があるだろうか。サルヴァシューラよ、我は多くの様相でもって有情に法を説く。鎮められるべき者の姿がどのような姿であっても、我はその姿をとり、法を説く。神々の世界では、神の姿となり法を説く。竜の国においては、竜の姿で法を説く。夜叉の国においては、夜叉の姿で法を説く。餓鬼の世界においては、餓鬼の姿で法を説く。人間の世界においては、人間の姿で法を説く。仏陀により鎮められるべき有情へは、仏陀の姿で法を説く。菩薩により鎮められるべき有情へは、菩薩の姿で法を説く。鎮められるべき有情がどのような姿であろうとも、我はまさにその姿となり法を説く。サルヴァシューラよ、そのように我は多くの様相で有情に法を説くのである。」

「なぜそうあるのかと疑問に思うのなら、サルヴァシューラよ、それはちょうど有情が様々な局面において法を聞くと同様に、それら誠実な有情たちは様々な局面において根本善をなすのである：彼らは布施に従事し、功德を積み、自分のためには睡眠もとらずに、死を忘れずにいる瞑想もするであろう。そのようなに積まれるべき善業を彼らは為すであろう。」

法を聞いたという原因により、彼らは以前の根本善を覚えることであろう。それは長期にわたって神々と人間達の目的、利益、そして幸福となるであろう。」

「サルヴァシューラよ、このように、サンガータ ダルマパルヤヤが聞かれるやいなや、特質や利益はこのように無限になる。」

「そしてそれらの有情はお互いに次のように話し合うであろう：{為され蓄積されたものによって、すべての有情を利益することを望む無上完全なる悟りにおいて直接に完全に覚醒する善法の果報は他にもあるに違いない。} と。法に信心を起こした者は皆、次のように言う：{完全に事物ありのままの法が存在する。} と。彼らの幸福の偉大なる果報は、法による無上の幸福である。無知で愚かな有情は次のように言う：{法は全く存在しない；法を超えたものも存在しない。} 彼らの大いなる果報は悪趣へ陥ることであろう。彼らは何度でも悪趣の地へと辿るであろう。八阿僧祇劫の間、彼らは地獄の苦しみの感覚を味わうであろう。十二阿僧祇劫の間、彼らは餓鬼の苦しみの感覚を味わうであろう。十六阿僧祇劫の間、彼らは阿修羅の中に生まれるであろう。九千阿僧祇劫の間、悪霊と悪鬼の中に生まれるであろう。一万四千阿僧祇劫の間、舌を持たないであろう。一万六千阿僧祇劫の間、母親の子宮の中で死を迎えることであろう。一万二千阿僧祇劫の間、ただの肉球となるであろう。一万一千阿僧祇劫の間、盲目として生まれ、苦しみの感覚を味わい、彼らの両親は{私らは無意味に苦しんだ。私らの息子の誕生は無意味だった。あの子を九ヶ月孕んだのは無意味だった。}と思うであろう。彼らは寒さと灼熱の感覚を味わうであろう。彼らはすさまじい飢えと渇きの苦しきをも経験するであろう。この世においてもたくさんの苦しみを経験するであろう。両親が家の中でその息子を見ても、喜びはなく、そして両親の望みは完全に断たれるであろう。」

「サルヴァシューラよ、このように聖なる法を放棄する者は地獄と畜生への転生へと辿るのである。」

——ここからはサンスクリット語から英語への翻訳——

「彼らの誕生の瞬間は、大いなる悲しみの矢に冒されるであろう。サルヴァシューラよ、{法は存在する。法における深遠なる学者が存在する。} と話す者は、根本善により二十阿僧祇劫の間ウッタラクルスの世界に生まれるであろう。彼らは二万五千阿僧祇劫の間トラヤストリンシャの神々の集団の中に生まれるであろう。トラヤストリンシャの神々の中から落ちて、またウッタラクルスの世界に生まれるであろう。彼らは母親の子宮の中に生まれることはないであろう。彼らは十万世界を見るであろう。彼らはスカヴァティと呼ばれるすべての浄土の光景を見て、そこへ赴き、まさにその地にて完全な悟りを得るであろう。」

サルヴァシューラよ、実にこのサンガータ　ダルマパルヤヤの偉大なる効能は、このようである。これに信心を据えるものは、もはや不運の一吹きによっても死ぬことはないであろう。彼らは清らかな道徳を賦与されるであろう。

「サルヴァシューラよ、このように言うものがある：{如来は日夜、多くの生き物を解放している。それでもこの世の生き物は減らない。たくさんの者が悟りを心に決める。たくさんの者が天国に生まれている。たくさんの者が幸せを成就した。それなのにどうして生き物は減らないのであろうか。} と。」

それから派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そして非信奉者達が次のような考えを抱いた：「皆で行こうではないか。我々は苦行者ゴウタマに反論すべきだ。」と。

その後すぐに、九百四十億の派閥者、放浪人、托鉢の僧、ブラフマー、そして数百人の非信奉者が、偉大な街ラジャグリハのあったところへ近づいた。その時その瞬間に、尊い人は微笑を見せた。

その後すぐに、偉大なる菩薩マイトレヤは座から立ち上がると、上衣を肩に掛け、右ひざを地につけて、尊い人に向かい手を組んで敬意を表し、彼に話した：「尊い人よ、その微笑の原因と理由はなんでしょうか。原因なしに、また理由なしに、如来、阿羅漢、完全なる仏陀は微笑を見せるのでしょうか。」

尊い人は言った：「血脈の子よ、聞くがよい。今日、この偉大な街ラジャグリハに、大きな集会があるだろう。」

彼は「尊い人よ、誰が来るのでしょうか。神々、竜、夜叉、人間、又は人間以外の者達でしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「マイトレヤよ、彼らすべてだ：神々、竜、夜叉、人間、そして人間以外の者達が今日ここにやって来る。そして八万四千のブラフマー達もやって来るだろう；九百億の派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そして非信奉者たちがやって来るだろう。彼らは我に反論をするであろう。我は彼らすべての反論者たちを鎮めるべく法を説教しよう。それらすべてのブラフマー達は無上完全なる悟りへの思いを起こすであろう。九百億の派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そして非信奉者は預流果を成就するであろう。百八十億の竜王がやって来るであろう。彼らは我から法を聞くであろう。それを聞くことにより、彼らすべてが無上完全の悟りへの思いを起こすであろう。六百億の神童が天からやって来るであろう。邪悪の者、マーラが、三百二十億の弟子を連れてやって来るであろう。百二十億

の阿修羅王達がやってくるであろう。五百人の王達は法を聞くために弟子達をも連れてくるであろう。我から法を聞くことで、無上完全なる悟りへの思いを起こすであろう。」

それから偉大なる菩薩マイトレヤは、頭を地につけて尊い人の足元に崇拝し、彼を周縁した後そこから姿を消した。

その後すぐに、偉大なる菩薩サルヴァシューラは座から立ち上がり、上衣を肩に掛け、右ひざを地につけて、尊い人のいる方向へ手を組み、敬意を表し、彼に次のように話した：「尊い人よ、それら五百人の王達はなんと呼ばれるのでしょうか。」

尊い人は言った：聞くがよい、サルヴァシューラよ。ナンダという王がおり、スナンダという王がおり、ウパナンダという王がおり、ジナルサバという王がおり、ブラーマセーナという王がおり、ブラーマゴーシャという王がおり、スダルシャナという王がおり、ジャヤセナという王がおり、ナンダセナという王がおり、ビンビサーラという王がおり、プラセナジットという王がおり、ヴィルダーカという王がいる。このように、先導する王達が五百人の王達である。それぞれの王が二兆の従者達を率いている。その中で、ヴィルダーカ王を除いては、すべての者達が無上完全なる悟りへと出離した。東方からは三百億の菩薩が来る。北方からは八百億の菩薩が来る。天底からは九百億の菩薩が来る。天頂からは一千億の菩薩が来る。それらすべての者達が十地に確立した。」

それからすべての菩薩たちは、尊い人を見るために、偉大なる街ラジャグリハのあるところ、霊鷲山のあるところ、尊い人のいる所に近づいた：そしてそれらすべての菩薩たちは、無上完全なる悟りへと出離した。

それから尊い人は、偉大なる菩薩サルヴァシューラに話しかけた：「サルヴァシューラよ、行くがよい。十方世界のすべての菩薩にこのように話しなさい：{今日、偉大なる街ラジャグリハにて如来が説法をした。したがって十方世界に住するあなた達は皆、手を組んで敬意を払いなさい。} と。そう宣言するやいなや、また法を聞きに戻ってきなさい。」

それから偉大なる菩薩、サルヴァシューラは彼の席から立ち上がると、頭を地につけて尊い人の足元に礼拝し、彼を周縁すると威神力により消え去った。

その後すぐに偉大なる菩薩サルヴァシューラは、十方世界に行くと、菩薩達に次のように知らせた：「友よ、今日、如来、シャキャムニ、阿羅漢、完全なる仏陀がサハの世界の偉大な街ラジャグリハにて生きとし生ける者達に説法をなさった。したがってあなた方揃って賛同の意を表しなさい。まさに今日、それはあなた達の幸福と幸運への素晴らしい恩恵と

なるでしょう。」

その後、偉大なる菩薩サルヴァシューラは十方世界へ赴いて、すべての仏達を敬意と共に崇め、菩薩達に話し終わった後、力強い男が指をはじくごとく、その合間に偉大なるラジャグリハ、尊い人のいる所へ戻って来て、彼の前に立った。すべての派閥者たち、放浪苦行者達、托鉢の僧達、非信奉者達、そしてブラフマー達はそこに集まった。たくさんの神々、竜、人間、人間以外の者達、そして五百人の王達は彼らの従者と共に集まった。三千三百億の邪悪なマーラ達も、従者と共に集まった。さてそのとき、偉大なる街ラジャグリハが振動した。そのすぐ後に、十方世界に天空から白檀の粉が舞い降り、天空の花も舞い散った；それらは尊い人の頭上の空中に大会場をなした。その時、神々の頭首であるインドラは如来の前に稲妻を落とした。

それからその瞬間、四方向へひどく荒々しい風が吹いた。偉大なる街ラジャグリハにあるすべての廃墟から、埃や砂を吹き飛ばした。十方世界に香水が降り注いだ。ウパラの花、蓮華、クムダ、プンダリカが十方世界に降り注ぎ、それらの花々は、花笠として生き物の頭上で止まった；そして如来の頭上の空中には八万四千の会場が現れた。それら花でできた八万四千の会場の中には、八万四千の座台が設けられ、それらは七種の宝石からできているように現れた。それらすべての座台には如来がお座りになり、説法をなさっていた。それからそれら三千の大一千世界が六つの方向に振動した。

その後すぐに、偉大なる菩薩サルヴァシューラはそこで手を組み、尊い人のいる方向へ敬しく頭を下げて、彼に次のように話した：「尊い人よ、この偉大なる街、ラジャグリハにおいて、このような奇蹟が見られる原因と理由はなんでしょうか。」

尊い人は言った：「それはまるで不安定で、浮ついており、傲慢で、利己的な男がおり、その男はとても貧しいことのようなのである。その男は、うぬぼれから、国王の門前までも足を伸ばし、国王が彼を聖視するであろうと思ひ込み、力づくで宮殿に押し入ろうとしたとする。それらかそれら王国の大臣達と、従者達はその男を捕まえ、あらゆる方法でその男を殴るであろう。それからその時、その瞬間に、国王がその貧しい男が力づくで中に押し入ろうとしたという出来事を聞くとする。それを聞いてから次のような考えが彼の心に起こるであろう：{その男、どんな手段によっても我を殺そうとしているのだ。} と。それからその国王を従者達に怒りを表し次のように言うであろう：{おまえ達、行くがよい。その男を山の裂け目に連れて行って処刑せよ。その者の世帯員すべて：両親、息子、娘、メイド、雇い人、そして職人をすべて滅ぼせ。} と。そして彼らはすべて殺された。彼の民、そして親類たちの集団はすさまじい悲しみの矢に苦しめられるであろう。同様に、サルヴァシューラよ、如来、阿羅漢、完全なる仏陀は、生きとし生けるものたちに達して説法するのであ

る。」

「それから、ちょうどその傲慢な者達、一般の衆生が如来の形や、色、性、そして姿からその印をとり入れて、「これが如来の体である。」と思うようなことに似ている。彼らはたくさん法を聞いてから傲慢さに陥るのである。彼らは様々なたわごとを話す。利己心と身勝手さから法自身を聞かず、またそれを他に示すこともない。誰かが経や詩節、それらの例えなどを解説したとしても、その者達はそれを理解することも注意深く聞くこともなく、むしろ「そんなことは自分も知っている。」と言うのである。それはどうしてか。それはこの傲慢さによって自身の博識に迷わされてしまったのからである。一般の衆生と交流し、法に関わる言葉を聞かない者達はそのような博識に迷わされるのである。それらの者は自分自身の詩を発表する。彼らは自身の文学と序文を発表する。彼らは全世界と自身へ不運をもたらす。彼らは社会の施しものを無駄にもたくさん食べるであろう。しかしながら食べた後にはちゃんと消化できない。」

「死に際に、彼らはとても恐れ、生き物達は次のように言うであろう：{多くの者達は、あなたが熟知した術によって訓練された。あなたがそれを自分で立証できないのは何故だ。} と。彼はそれから次のようにそれらの者達に言うであろう {友よ、ここへ来て、私はそれを自分で立証できない。} と。そこでそれらの者達は様々に嘆いた。たったその一人のために多くの親類が無実でありながらも業の結果として命を奪われたように、同様にそれらの者達も死に際には、不善の友と交流したために自身が地獄と畜生の腹に吸い込まれるであろうことを予期した。」

「したがっておまえ達ブラフマー、派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そして非信奉者に言おう：向こう見ずになるのではない。ちょうど翼のない鳥は、神々の世界へたどり着くために空を舞うことができないように、あなた達のように自分勝手に利己心に住する者達には、涅槃を成就することはできない。そのような威神力はそなた達の中には見出せない。それは何故か。おまえ達は業のために、雌鳥の腹から生まれる者のようである。まもなく、死滅する本性であるこの体は死に終わるであろう。死のときには絶望と悩み苦しむであろう：{なぜ私は、神々の幸せや人間界の幸せを享受することもできないこの体を維持してきたのだろうか。我々は涅槃の場に住することもない。無意味なことといえばこの体が維持されてきたことだ。我々の来世は何であろうか。誰が我々の保護者となるのであろうか。我々の生死はどこで迎えられるのだろうか。} と。」

それから尊い人は、それら派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そしてブラフマーに話しかけた：「友よ、七種の宝石でできたジャンブデヴィパにて絶望することはない。法の宝から疎外されることはない。友よ、疑いのあることは何でも如来に尋ねるがよい。我がおまえ達

のすべての要望を満たそう。」

その後すぐ、それらすべての派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、そしてブラフマーは彼らの座から立ち上がりマントで一方の肩を覆い、手を組み、尊い人に尋ねた：「尊い人は、日夜輪廻世界から生き物を解放しております。しかしながら、この世の生き物は減りも増えもしません。尊い人よ、生き物が常に同じ数である原因と理由はなんでしょうか。その原因とその消滅をお示してください。」

そこで尊い人は、偉大なる菩薩バイシャヤセナに話しかけた：「派閥者たちは素晴らしい精神的な甲装を備えている。彼らは大いなる精神的な障害を一掃するため、法の大きいなる灯火をつけるために多くの質問を次々と尋ねるのであろう。その後には、実に起源と消滅の原因を引き起こす老若の衆生は存在しなくなるであろう。バイシャヤセナよ、実に何も知らない老若の者達が存在するのだ。」

「バイシャヤセナよ、それはまるである男が彼の頭を洗い、真新しい服を着て外出するようなものである。人々はその男に次のように言う：{あなたの新品の服は良く似合っていますね。} と。それからまた他の男がいるとする。彼は頭を洗い、古着を着るとする。それらの服はだぶだぶで美しくない；その男は、頭はよく洗ったが、着ている物が美しくない。同様に、バイシャヤセナよ、ジャンブデヴィパを美しく飾らない老年層がいる。しかしながら若年層は起源と消滅を示す。」

その後、それらの派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧達、非信奉者、そしてブラフマー達は皆、彼らの席から立ち上がり、次のように尊い人に言った：「尊い人よ、我々の中で誰が老年で、誰が若年なのでありますか。」

尊い人は言った：「老いた者とは、地獄、畜生、そして餓鬼の痛々しい感覚を何度も見てもなお、今日それを見足りない者たちである。」

それから、それらの派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、非信奉者、ブラフマー、そして竜王達は皆、次のように尊い人に言った：「尊い人よ、我々はもはや輪廻の痛々しい経験に耐えられません。」

そしてそれら派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、非信奉者、ブラフマー達は次のように言った「事物の本性を直接に悟ることのできる若年はありません。」

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に話した：「聖なる法師よ、どん

なにこれらの者達の関心を積極的に引くことが困難かごらんください。」

尊い人は言った：「聞くがよい、バイシャヤセナよ。今日如来は全世界を見据えている。」

その後すぐに、九百四十億の新たな者達が如来の前に立ち、彼に挨拶も話すことも、会話もせずに沈黙を守っていた。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、これらの者達があなた様に話すことも会話することもご挨拶することもなく、又は質問することもない原因と理由はなんでしょうか。」

尊い人は言った：「聞くがよい、バイシャヤセナよ。見習い僧を見るがよい：彼らは〔見習い僧は常態の境遇を悟ることができない。〕と言う。」

そしてそれらの者達は：「聖なる法師よ、我々は見習い僧であります。彼岸の法師よ、我々は見習であります。」と云った。

尊い人は言った：「それではそなた達のなかでこの世を正確に見据え、自身の体から世界の大きさを示すがよい。」

それからその時、その瞬間に九百四十億の見習い僧は、空中に立ち上がると体が消えてなくなり十地を所有することとなった。

その後すぐに、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、このように努力をする者達は、輪廻の消滅と枯渴をほどよく獲得した。尊い人よ、まさに今日、その者達は生を受けた。尊い人よ、まさに今日、その者達は解放され、全員が十地に確立しました。」

その上、すべての派閥者、放浪の苦行者、托鉢の僧ら、非信奉者とブラフマー、竜王、邪悪なるマーラならびにそれらの従者の側からは、混乱を引き起こすためにやって来たが、彼らは皆、次のように尊い人に言った：「尊い人よ、我々は混乱を引き起こすために尊い人に近づきました。尊い人よ、けれども我々はこのダルマパルヤヤを聞き、仏陀と法の両方に信心を起こしました。尊い人よ、我々はそれから尊い人と同じ仏陀の幸福を得たいと存じます。我々はこの世であなた様と同じような如来、阿羅漢、完全なる仏になりたいと存じます。」

尊い人は言った：「その通り、良いことだ、全くその通りである。そなた達が如来、阿羅漢、完全なる仏陀に近づき、このサンガータスートラ　ダルマパルヤヤを聞いた後、無上完全なる悟りへの思いを起こしたので、その根本善により、良いことにもまもなくそなた達は無上完全なる悟りへ目覚めるであろう。」

それからこの言葉が尊い人から発せられるや否や、一瞬の間にすべての派閥者、放浪苦行者、托鉢の僧、非信奉者そしてブラフマー達は皆、現象の非生産に関する忍の地位を成就し、すべての者達が菩薩乗を成就して十地に確立した。それらすべての菩薩は椰子の木七本分の高さまで空中に舞い上がると、如来に宝石でできた七つの会場を供養した；そして鍛錬された変化業と、統制業、そして威神力を使った。それしてその時、尊い人の頭上空中に立ち、様々な花を尊い人に撒き散らした。彼らは如来を瞑想した。彼らは自身の体の中に仏陀の観念を生み出した。一兆もの多くのデーヴァプートラも如来に花を撒き散らした。

彼らは次のようにひとこと言った「苦行者ゴータマは、偉大なものを獲得をした；彼は偉大なる大地だ；救世主だ；彼は禅定の力を成就した；知者だ；分別の保持者、方便を通して次第に衆生を輪廻から解放する。彼はこの道義の語を発することだけで多くの者達が輪廻から解放される。」

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは、座から立ち上がると、上衣を肩に掛け、右ひざを地につけて尊い人の方向へ手を組み、次のように尊い人に話しかけた：「尊い人よ、これらの神々プトラがこのような言葉を話し、如来を真に称える賛美と共に多くの奇跡的な偉業を行なう原因と理由はなんでしょうか。」

尊い人は言った：「聞くがよい、血脈の子よ。彼らは我を賞賛しているのではない。彼らは自身を賞賛しているのだ。彼らは、自身の体を法の台座に据えるであろう；彼らは自身の優越なる法の座に確立するであろう；彼らは自身の体から法の光を放つであろう；彼らはすべての仏に抱かれるであろう。無上完全なる悟りを悟ったことにより、説法をするであろう。」

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に話した：「多くの者達です、聖なる尊師よ、彼岸の尊師よ、多くの者達が日夜解放されています。それでも今日、生き物は消滅することがありません。」

尊い人は言った：「素晴らしい、バイシャヤセナ、如来からそのことについて質問することが適当であると思ったことはとても素晴らしい。聞くがよい、バイシャヤセナよ。それは

まるで裕福で、大金持ちで、大富豪で、財産に山ほど持つ者がいるようなものである。彼は大金と大量の穀物、宝物と穀倉を持っている。多くのメイドや召つかい、そして職人を持っている。莫大なお金を持っている。彼はまた、よく肥えた土地と庭を、そして大麦、小麦、米、胡麻、野生豆や豆などの穀物を持つ。春になるとその男はそれらすべての富と穀物の種を蒔くであろう。それに続く季節にはそれらすべての富と穀物は成熟する。それが成熟したことを知り、収穫物を刈り入れた後、彼はそれらを家に送るであろう。その男は家の中にそれら穀物の種を別に保管し、保管してからそれを所有することになる。春の間、彼はまたそれらの種を蒔く。同じようにしてバイシャヤセナよ、過去に善業をなし、それらの者達は何度も聖衆の世界を探して、それらの善業が使い果てるときに、根本善を植えるのである。根本善を植えたことにより、その正法において彼らの善行の効力があるのである。善行の効力を得てから彼らはすべての法を増長する。すべての法を増長してから彼らは幸福と喜びを生じる。それからその幸福と喜びの思いにより、バイシャヤセナよ、何億阿僧祇劫もの間滅びることがない。」

「同じように、バイシャヤセナよ、(悟りへの) 初心を発起した菩薩は、決して破滅することがない。その者はすべての法を凝縮して悟る。」

彼は「尊い人よ、初心を発起した菩薩は、どのような夢を見るのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、初心を成した菩薩は夢の中で、多くの恐怖を見る。それは何故か。恐怖を夢の中で見るとき、彼はすべての邪悪な行為を浄化するからである。バイシャヤセナよ、悪人はひどい痛みを払うことができない。しかしその者は、悪夢を見ることによって恐怖感を持たない。」

バイシャヤセナは「尊い人よ、初心を発起した菩薩が、夢の中で見る恐怖とは何でしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、彼は燃え上がる火を見る。その菩薩は次のような考えを起こすに違いない：{私はすべての欲を燃え尽くした。} と。次に、バイシャヤセナよ、彼は渦を巻いて荒れ狂う水を見る。そこで初心を発起した菩薩は恐怖を感じることはないであろう。それは何故か。バイシャヤセナよ、それはすべての欲の束縛から自由になったため、その菩薩によってすべての悪が滅ぼされたからである。第三にバイシャヤセナよ、初心を発起した菩薩は恐ろしい夢を見る。」

彼は「尊い人よ、それは何でしょうか。」と言った。

「彼は、自分の頭が切り落とされるのを見る。そこではバイシャヤセナよ、初心を発起した菩薩は恐れることがない。それは何故か。なぜならその時彼は次のように考えるからである：{情熱、憎悪そして欲を私は切り落とした。六界輪廻を私は打ち負かした。} と。事実、彼には、もはや地獄に住することも、畜生、餓鬼、阿修羅、竜、そして神の世界に住することもないであろう。バイシャヤセナよ、初心を発起した菩薩は仏の浄土に生を受けるのである。」

「バイシャヤセナよ、その後になって、ある者が菩提の思いを成熟する原因をなしてから、多大な非難を受け、侮辱的な立場にいることになるとする。そこでは初心を発起した菩薩は憂鬱な考えを起こすことも、それに甘んずることもないであろう。」

バイシャヤセナよ、我が説いた正法はたくさんある。バイシャヤセナよ、我は無数数千数百の阿僧祇劫の間、難行に従事したが、それは最高の統治権を味わうためでも、生活を楽しむためでも、権力を享受するためでもない。バイシャヤセナよ、我は現実の本性を理解する目的のために難行に従事した。そして我は、このダルマパルヤヤを聞くまでは、無上完全なる悟りを実現しなかった。バイシャヤセナよ、このサンガータ ダルマパルヤヤを聞いたまさにその瞬間、ちょうどその日のうちに、我は無上完全なる悟りに目覚めたのである。バイシャヤセナよ、深遠なるものはこのダルマパルヤヤである。バイシャヤセナよ、このダルマパルヤヤを聞くことは、無数何千何百阿僧祇劫の間にさえ稀なことである。」

バイシャヤセナよ、如来の誕生は非常に稀である。バイシャヤセナよ、とても稀なことといえば、このダルマパルヤヤを記憶に留める者達である。このダルマパルヤヤを聞く者たちすべては無上完全なる悟りを得るであろう。バイシャヤセナよ、その者達は、十万阿僧祇劫もの間、輪廻を越えるであろう。彼らは清らかな仏浄土を手に入れるであろう。また消滅のあり方をも悟るであろう。維持を悟ることができるであろう。方便の要点を悟るであろう。直感的知識で方便の要点を悟ることができるようになるであろう。方便の消滅を悟ることができるようになるであろう。バイシャヤセナよ、{消滅}という言葉を通して言われる意味は何だ。」

彼は「尊い人よ、{法の要点}の意味がそこに言われております。」と言った。

尊い人は「バイシャヤセナよ、{法の要点}とは何か。」と言った。

彼は「尊い人よ、法とは {固い決心}、{道徳}、{持戒} であると言われており、そのようなものが法の宝と言われております。尊い人よ、これらで法の宝が成り立っております。」

尊い人は「素晴らしい、バイシャヤセナよ、この事柄について如来に尋ねることが適当であると思ったことは素晴らしい。」と言った。

彼は「尊い人よ、どんな理由から如来がこの世界に出現するのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、深遠な学問の規定を知る者達は、如来の姿を知る。如来の姿を知ったことにより、彼らはこの如来の姿が幸福の場であることを知る。そして如来がこの世界に現れるとき、それらの者達はすべての法を知る；方便を知る。彼らは俗、超世俗の法を悟り、俗と超世俗の認識を悟る。」

彼は「認識を悟り、どのように涅槃を理解するのでしょうか。」と言った。

尊い人は「バイシャヤセナよ、彼らは法そのものを知るのである。法そのものを知ったことにより、バイシャヤセナよ、法典を悟るものの初めの利益を創る。正法を掴むことで利益がある。バイシャヤセナよ、それはまるで商人のようである。彼が利益のために旅に出て、他人と自分の金と、千人分の荷物をもって出発する。出発するときに彼の両親は次のように言う：{血脈の子よ、聞きなさい。今回おまえは他人と自分の金、それから千人分の荷物を担った。だからこの金の安全を確保し、わずかでも無駄にしてはならない。大きな利益を得たら、金を安全な所に確保しなさい。それは我々にとって大きな利益となり、幸せな生活を送ることになるのだから。}と。その息子も両親に{わかりました。}と言うであろう。そうを言って、金を受け取ると出発する。それから、その商人は不注意からたったの一月でその金をすべて失い消散させてしまった。その男は頭を悩ませ悲しみの矢に突き刺され、恥ずかしさに縮んで自分の家に入れない。彼の両親は{おまえの息子がすべての金を浪費してしまった。}と聞き、そして希望を失い、悲しみに打ちひしがれるであろう。服を引きちぎり、嘆き泣き叫び、次のように咽ぶであろう：{不運な息子が我々の子として我々の家に生まれた。実に家全体が崩壊してしまった。あの子は我々を奴隷と労働者としておとし入れた。}そして彼の両親は心が不安に満ちたまま絶望の中に死んだ。それからその息子は{両親が絶望の中に死んだ。}と聞き、彼自身もまた絶望の中に死んだ。このようにバイシャヤセナよ、如来の側からはこの事態を説く。我の伝言に信心を持たない者達は、法の宝から切り離され、死に際には心が悲しみの矢に突き刺され、絶望の中に死を迎えるのである。その両親のように、金のために嘆き悲しみ、悲しみの矢に突き刺され、自分達と他人の金のために心は心配に満ちて、悲しみの矢に侵され、絶望の中に死んだのだ。そのようにバイシャヤセナよ、我の伝言に信心を持たないものは嘆き、苦悩し、その後の死に際には、はなはだしい痛み苦しむのである。」

「過去の善行（の果報）を享受しておきながら、幸福の地に達した後には更なる善行を為

さない。そこで彼らは功德を使い果たし、心は悲しみの矢に突き刺され、その時、その瞬間に、ひどく恐ろしい地獄、畜生の腹、そしてヤマの世界に生まれることを見て、死の際には次のようなことが心に浮かぶ：{地獄、畜生、そして餓鬼とヤマの世界を見ることがないよう、そしてそこではなはだしい痛みに苦しまないように誰が私の守護となるのであろうか。} と。彼が狂乱してしゃべりながら来世に向かう間に、彼の両親は次のように話すのである：{息子よ、我々はどうしたらいいのか。} と。そして彼らは詩節でもって彼に話しかけた：

そこでは実に、病の苦しみ、
非常な恐れはおまえを捕らえることはできない。
息子よ、おまえは死にはしない。
死への恐れとは病人のためにある。
病の危機と恐怖からの自由は御前のものだ。
おお息子よ、しっかりしろ！
これを乗り越えろ。

息子は言った：

私の意識はうすらぐ。体はとても痛む。
すべての肢体が痛む。私の死が見えている。
目は全く見えず、もはや耳は聞こえない。
もはや聞こえるようになることはない。もう体は動かない。
肢体が私を苦しめ、それらは命のない木片のようだ。
母よ、{死は来ない。}と言って慰めておくれ。

母は言った：

息子よ、そういわないでおくれ。私を驚かせないでおくれ。
おまえの体は熱に侵され、気が転倒しているのだよ。

息子は言った：

熱はない：
病もその苦しみも感じない。
私は恐ろしい死を見る；私の体は酷くやられた。
自分でも体全体が苦痛に塞ぎこまれているのがわかる。

誰に帰依したらよいのか。誰が私の救世主になるのであろうか。

両親は言った：

息子よ、神の怒りが御前に降りかかっている。
神々にいけにえを捧げればすべてうまく行く。

息子は言った：

そうしておくれ。
私のためにすべてをためしておくれ。
早く行って、寺の僧に聞いておくれ。

そして彼の両親は寺に行くと、僧に神へお香を供養させた。神にお香を供養した後、寺の僧は次のように言った：「神はあなたに怒っている。神に供養を捧げなければならない；いけにえの供養が必要だ。犠牲は殺されなければならない、人間の男も一人も殺されなければならない。そうしたらあなた達の息子は熱から解放されるでしょう。」と。そしてその時、両親は思った：「どうしよう。我々は貧しい。神が喜ばなければ、我々の息子は死ぬであろうし、その反対には我々の味方になってくれるであろう。だから貧しくとも犠牲の男を持参しよう。」と。それから自宅に素早く帰るとすべて、家の中にある所有物をみんな売り払い、犠牲者を買いに行った。それから彼らはある男に次のように言うのである、「申し訳ないが我々に金をゆずってくれ。貸付金にしてほしい。十日後に返せればよいだろう。それを返すことができなければ我々は二人ともあなたの奴隷、そして召使になろう。」と。彼らは金を受けとり、犠牲者の男を買いに行った。それから犠牲者の男が買われていった；しかしその男は殺されるなどということは知らなかった。それから両親はうわつき、家に入ることができなかった。寺に行くと、彼らは僧に話しかけた：「それじゃあいけにえを早速捧げておくれ。」それから両親は自身の手で犠牲者を殺し、男の命を奪った。それから僧は供養のための奉納の脂肪に火をつけ、供養が始まった。それからその神が降りてきて次のように言った：「おまえたちの息子を容認しよう。」と。それから両親は幸福と喜びに真っ盛りになり、言った：「我々が奴隷となっても息子が生き延びるほうがいい。」と。そこで両親はその神をよく崇拜し実家に舞い戻った。そこにつくと息子が死んでいるのを見た。それから両親は悲しみと惨めさにこことが真なし身の矢に突き刺され、まさにその場で絶望の中死んでしまった。バイシヤヤセナよ、これがまさに悪友と交流するとどうなるかということとして理解されるべきものである。」

彼は「尊い人よ、質問があります。至福の人よ、質問があります。」と言った。

彼は「聞くがよい、バイシャヤセナよ。」と言った。

彼は「尊い人よ、それらの者達はどこに生まれ変わったのでしょうか。彼らの運命は何だったのでしょうか。」と言った。

彼は「十分だ、バイシャヤセナよ。そのようなことを聞いてどうするのか。」と言った。

彼は「聞きたいです、尊い人よ、聞きたいです、至福の人よ。」と言った。

尊い人は言った：「そこ神タイシャヤセナよ、その母はラウラ大地獄に生まれた。その父はサムガタ大地獄に生まれた。その息子はタパナ大地獄に生まれた。寺の僧は阿鼻大地獄に生まれた。」

彼は「尊い人よ、無実の男はどこに生まれたのでしょうか。彼の運命は何だったのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、無実の男は、トラヤストリムシャの神々の社会に生まれたとされている。」

彼は「尊い人よ、その男がトラヤストリムシャの神々の社会に生まれた原因と理由は何でしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「聞くがよい、バイシャヤセナよ。死に際に、命を奪われている間に、その男は如来に彼の信心を据えて、次のようなことを言った：「如来、阿羅漢、完全なる仏陀である尊い人に敬意を表す。」と。彼は一度だけこう言った。その根本善により、バイシャヤセナよ、彼は六十阿僧祇劫の間トラヤストリムシャ神の幸福を享受するであろう。彼は過去生を八十阿僧祇劫の間記憶し、生から生へと生まれ変わる間にもすべての悲しみから自由であろう。生まれるや否や、彼のすべての悲しみは消えうせるであろう。確かにすべての者達が悲しみを完全に消せるということではないが。」

こう話されると、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に話した：「尊い人よ、すべての者達がそれらを消せるわけではないというのはどうしてでしょうか。」と。

尊い人は「バイシャヤセナよ、精力が養われなければならないからだ。」と言った。

彼は「尊い人よ、精力を傾注するとはなんなのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、聞くがよい。精力は果報の現れであると言われる：言うなれば預流果はある精力の段階である。一來向の果はある精力の段階である。不來向の果はある精力の段階である。阿羅漢である状態と阿羅漢の消滅の果はある精力の段階で

ある。独覚仏の果と独覚仏の知識の果報はある精力の段階である。また、菩薩の段階の果報と悟りの段階は、精力の段階である。バイシャヤセナよ、それらは精力の段階として知られている。」

彼は「尊い人よ、預流入と 預流果はどのように示されるのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、それはまるである男が木を植えるようなものである。植えられた木からその日のうちに芽が伸びた。まさにその日のうちにその芽が出たところから下方へ一ヨジヤナも伸びた。同様に第二の男が木を植えた。同じ日のうちに、風に揺らされたために芽は伸びなかった。それからその男は、その場から木の根を抜いてしまった。それからもう最初の男は彼と口論となり、けんかし、ののしり、攻撃した：{どんな理由でおれの所有物を掘り起こしたのだ。} と。そしてその時、その瞬間に王は {二人の男が県下をしてお互いを攻撃し、口論している。} ということを知った。その王はそこで二人の男達へ使者を送った。{行くがいい。それらの者達をここへ連れてきなさい。} その使者は {かしこまりました陛下。} と答え、迅速に走っていくと、それら二人の男達に次のように言った。{王があなた方二人を召喚しています。} と。それからその時、そのうちの一人が恐ろしくなり警戒をしたが、二人目の男は怖がらず、また警戒もしなかった。王のいる所へ連れられ、その前に召された。それから王は次のように二人に話した {その者達、なぜ私の県下で口論し、ののしり、そしてお互いを攻撃するのか。} と。その後二人は立ち上がり次のように王に言った {お聞きください陛下。我々には土地がありません。借地に一本の木を植えました。その日のうちに芽、葉、花、そして半分未熟で半分熟した果実が現れました。その日のうちに、その土地の区画に、この二番目の男が木を植えました。その木からは芽が出ず、風が吹いたために葉も花も果実も現れませんでした。偉大なる王よ、その木の根は一ヨジヤナの距離さえも根付きませんでした。したがってこの男は {それはおまえのせいだ。} といって私と口げんかになりました。ですから陛下、どうかご自分でお確かめ下さい。それについて私に非はありません。} それから王は三千人の大臣を召集し、彼らに {何か言うことはあるか。} と言った。そして大臣達は {偉大なる王よ、我々は何を言ったらよいのでしょうか。} と言った。王は {おまえたちは木が植えられたその日のうちに芽、そして葉、花、それから半分未熟で半分熟した果実が育ったということを見聞きしたことはあるか。それはそなた達の判断に任せよう。} と言った。その後、それらの大臣たちは席から立ち上がり、次のように王に言った。

{偉大なる王よ、このことについて我々が決断を下すことは適當ではないと見なし、また我々はそのことについて決断をできかねます。これは謎です、偉大なる王よ。この男に更なる詰問が為されるべきです。} と。王は {その者、話すがよい。おまえの言ったことは本当か。} と言った。彼は {偉大なる王よ、それは本当です。} と言った。王は次のように言った：

我は全く見たことも聞いたこともない。おまえのそのことば、〔木が植えられたその日のうちに芽が出た。〕というのは信じがたい。

おまえは、葉、花、果実がその日のうちに生じたという。男は手を組み次のように王に言った、

{ご自分で行って木をお植えになり、芽が出るのをご覧下さい。}

それで、王は三千人の大臣達と外出した。彼はまた、それらの二人を監禁した。それから王は自ら木を植えた。しかしその木は芽も、葉も、花も、果実さえも実らなかった。それから王は怒って次のように言った、「行くがよい。すぐに斧をもってこい。」と。それらが持ち込まれると、その男が植えた葉、花、そして果実が現れた木を怒りで切り倒した。そしてその一本の木が倒れると、十二本の木が現れた。十二本の木が切り倒された；そこから、七種の宝からなる根、葉、果実、そして芽と共に二十四本の木が現れた。それからそれら二十四本の木から、鶏冠とくちばしが金で、翼が七種の宝でできた二十四羽の雄鶏が現れた。それから王は怒りに負け、斧を自分の手に取り、木に振り下ろした。それが木に刺さると、その木から甘露の汁が流れ出た。それからその王はいらいらして {帰ってそれら二人の男達を釈放せよ。} と命令した。彼らは {かしこまりました陛下。} と言い、迅速に駆け戻ると二人の男達を牢屋から釈放し、木があったところに連れてきた。そして王は次のように尋ねた。{なぜ御前が植えた木は一本でありながら、切り倒されると二十四本になるまで二倍ずつ増えたのか；そして我が植えた木は芽も出さず、葉も、花も、果実も実らせないのはなぜか。} と。それからその男は次のように言った。{偉大なる王よ、私の持つような功德はあなたの中に見い出せません。} と。それからそれら三千人の大臣たちは両膝を地面につけて、次のようにその男に言った、{あなたが国を統治すべきだ。前代の王は王にふさわしくない。} と。そこで男はそれらの大臣達に詩節でもって答えた：

主権など私には無意味であり、穀物や富にも意味がない。

私の信心は仏陀にある。

どうか私が二本足の生き物の中で優位となりますよう。

どうか私が静寂の中に如来が住している涅槃の世界に行きますよう。どうか私があるあなた方に涅槃の街へ通ずる法を説きますよう。

それから彼は結伽趺坐を組み、懺悔した：「私は過去に悪をなしました；王の牢獄へ行きました。けれど今ここで決意したことにより私の悪業が消耗されますことを。」

「それからそれら二十四羽の雄鶏が、それらのダイヤモンドのくちばしで楽器をたたいた。それからその時、その瞬間に三万二千の会場が現れた；そしてそれぞれの会場は大きさが二十五ヨジャナあるように現れた。それぞれの会場には金のくちばし、金の鶏冠、そして金の頭を持った二十五の雄鶏が現れた。それらは人間の言葉を話した：

{偉大なる王よ、木を切り倒したことはよろしくない。一億本ある木の中の二十四本が彼の前に立った。悪業のために、あなたは苦い果実を味わうでしょう。その木を植えた人をご存知ですか。}

王は言った：

我はそのようなことは知らない。偉大な苦行者よ、説明したまえ。木を植えたのはどんな偉大な者なのか。

鳥は言った：

彼は実に世界の灯火です；彼は指導者として現れ、輪廻の束縛からすべての衆生を解放しています。

王は言った：

木が育たなかったその二番目の男は誰なのか。彼はどんな悪業を為したのか。鳥よ、説明せよ。

鳥たちは言った：

木が育たなかった男は愚かなデーヴァダッタです。善行を為さずにどうして彼の木が育ちましょうか。

そしてその時、その瞬間に三千人の大臣達はこのダルマパルヤヤを聞いたことにより皆が十地確立し、直観の知識を備えた菩薩となった。そして王は十地に確立すると、正法の悟りを得た。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、三千人の大臣達が直観の知識を得て、十地に確立したその原因と理由はなんでしょうか。」

尊い人は言った：「聞くがよい、バイシャヤセナよ。それを説明しよう。」

それから尊い人は微笑を見せた。そして尊い人が微笑んだまさにその瞬間に八十四万の様々な色、青、黄色、赤、白、茜色、そして銀のような数千数百万の色の光線が尊い人の

口から射し出した。それらの光線は無限無数の世界を照らし出してから戻ってきて、尊い人を三度周縁してから、彼の頭の中に消えた。その後偉大なる菩薩バイシャヤセナは席から立ち上がり、上衣を一方の肩に掛け、右ひざを地につけて、手を組んで尊い人のいる方向へ敬意を表わし、次のように彼に話した：「尊い人よ、微笑を見せたその原因と理由は何でしょうか。如来、阿羅漢、完全なる仏陀は、どんな原因もどんな理由もなしに微笑むのでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、四方すべての世界から来た人々の体全体が私の前にあるの見えるか。」

彼は「いいえ、尊い人よ、私には見えません。」と彼は言った。

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、それでは見渡してその群集を見るがよい。」

そこで偉大なる菩薩バイシャヤセナは見渡すと。東方に七千ヨジャナも伸びた一本の木が現れた。そこでは一方に二百五十億人の体が集まっていたが、彼らは話も、会話もお互いに話すことも、食べも、立ち上がりも、歩きもしなかった。彼らは静寂の中に待機していた。南方には七千ヨジャナも伸びた一本の木が現れた。そこで二百五十億人の体が集まった。しかし彼らは話も、会話も、話し合うことも、談話も、立ち上がることも、歩きもしなかった。彼らは静寂の中に待機していた。西方には七千ヨジャナも伸びた一本の木が現れた。そこでは二百五十億人の体が集まった。しかし彼らは会話も、話も、話し合うことも、談話も、立ち上がることも、歩きもしなかった。彼らは静寂の中に待機していた。北方には七千ヨジャナも伸びた一本の木が現れた。そこでは二百五十億人の体が集まった。しかし彼らは話も、会話も、話し合うことも、談話も、立ち上がりも歩きもしなかった。彼らは静寂の中に待機していた。天には七千ヨジャナ伸びた一本の木が現れた。そこには二百五十億人の体が集まった。しかし彼らは話も、会話も、話し合うことも立ち上がることも、歩きもしなかった；彼らは静寂の中に待機していた。天底には七千ヨジャナ伸びた一本の木が現れた。そこでは二百五十億人の体が集まった。しかし彼らは話も、会話も、話し合うことも、談話も、立ちも歩きもしなかった。彼らは静寂の中に待機していた。

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは尊い人に言った：「私は如来、阿羅漢、完全なる仏陀である尊い人にあることについてお尋ねしたいと存じます。もし尊い人が、この疑問を解くために質問の機会をお与え下さるのなら。」

こう言うと、尊い人は偉大なる菩薩バイシャヤセナに次のように言った：「バイシャヤセナよ、何でも聞くがよい。どんな疑問も解いておまえの思いを満足させよう。」

こう話されると偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、なぜこれら四方世界の人の体がここへ来ているのでしょうか。天と天底の空間に五百億の人の体が来ているのは何故でしょうか。彼らはなぜ会話も、話も、談話も、尊い人に敬意を表することも、立ちも歩きもしないのでしょうか。彼らは静寂の中に待機しています。尊い人よ、その原因と理由は为什么呢。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、行くがよい。如来に自分で尋ねるがよい。{何の世界からそれらの人々の体は来たのでしょうか。} と。」

彼は言った：「尊い人よ、誰の威神力によって行けばよいのでしょうか。如来の加持力によってでしょうか、それとも私自身の威神力によってでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、自分の威神力によって行き、如来の加持力によってもう一度戻ってくるがよい。」

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは、尊い人を三度周縁するとその場から消えていなくなった。

さてこの世界から九百六十億の世界を越えたところに、チャンドラプラディパという世界が存在する。そこにはチャンドラヴァティ クシャトラと呼ばれる如来、阿羅漢、完全なる仏陀がおり、存在し、そして生活をしている。彼は最前におかれ、八百億の偉大なる菩薩に囲まれて説法をしていた。それから偉大なる菩薩バイシャヤセナが、チャンドラプラディパのいる世界にたどり着いた。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは尊い人のいるところに近づき、目の前に立つ如来、阿羅漢、完全なる仏陀である尊い人チャンドラヴァティ クシャトラの足元に頭をつけて崇拝した。そこに立ち上がり、尊い人がいる場に手を組んで敬意を表したあと、彼は次のように尊い人に言った：「尊い人よ、私は九百六十億の世界を越えて、サハの世界の聖なるシャキャムニ如来がおられる浄土から参りました。尊い人よ、私はそこで見たほど多くの生物を見たことはありません。尊い人よ、サハの世界におられる尊い人シャキャムニ如来の面前において、十方から多くの人々の体が集まったその原因と理由は何でしょうか。そこに留まる者たちほど多くの人々はここには見当たりません。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、彼らはまさにその場にさまよい、留まっているのだ。」

彼は言った：「尊い人よ、それはどうしてですか。」

尊い人は言った：「それらの者達は知覚のない木々から生じたからである。」

彼は言った：「尊い人よ、どこから知覚のない木々から人が生じるなどということを見たり聞いたりされたのでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、知覚のない木から人が生じるということを見たことも聞いたこともないか。」

彼は言った：「尊い人よ、知覚のない木から人が生じるということは見たことも聞いたこともありません。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、見てみたいか。それならここに示そう。」

彼は言った：「尊い人よ、見てみたいです。至福の人よ、そう願います。」

それから聖なるチャンドラヴァティ クシェトラ如来はその時に何百もの功德に飾られた彼の腕を伸ばした。その腕から一千億人の体が現れ、それぞれの体が百本の腕を伸ばしてから如来の体に様々な香水と軟膏を塗り広げた。

それからその聖なるチャンドラヴァティ クシェトラ如来は、偉大なる菩薩バイシャヤセナに話しかけた：「バイシャヤセナよ、如来にあらゆる香水、花々、そして軟膏などを散りばめる人々の体を見たか。」

彼は言った：「尊い人よ、見ています、至福の人よ。」

尊い人は言った：「したがって知覚のない人々の体は現れる。したがって知覚のない人間は生じるのである。」その後、一千億の群集それぞれが百本の腕をひろげた。その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナはそれを見て尊い人に言った：「尊い人よ、何故ですか。至福の人よ、何故ですか。一瞬の間にそれらの人々が百本の腕をひろげました。尊い人よ、百本腕の人々が解放されないのでしたら、二本腕の人間が解放される確立はもっと少ないではありませんか。」

尊い人は言った：「そうだバイシャヤセナよ；知覚のない生き物が生じ、知覚のない生き物が絶える。バイシャヤセナよ、我々の体もまた知覚のないものとして理解されるべきであ

る。」

彼は言った：「尊い人よ、若年とは誰のことですか。老年とは誰のことでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、若年と老年は存在する。」

彼は言った：「尊い人よ、誰が若年で、誰が老年なのでしょう。」

尊い人は言った：「今ここに広まっていた者達は老年である。木から生じた者達は若年である。」

彼は言った：「私は若年達を見たいと存じます。」

それから聖なるチャンドラヴァティ クシェトラ如来は右腕を伸ばした。そして十方世界から、一千億の人々の体がやって来た。天底と天からは五千万の人々の体がやって来た。それらの人々の体は、尊い人の足元に頭をつけて崇拜したあとは会話も、如来と話すこともせずに、静かにしていた。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように言った：「尊い人よ、これらの者達はなぜ会話も、如来と話すこともせずに、静かにしているのでしょうか。」

尊い人は言った：「わからないか、バイシャヤセナよ。この地における知覚のない者達は話も、会話もせず、法の教えの集成も理解しないのだ。それはなぜか。バイシャヤセナよ、ここにいるすべての若年は、誕生も、消滅も理解せず、老いも病も、悲嘆も、嘆くことも、愛する人からの離別も、嫌いな人と出会うことも、死も、また突然の死も見ることがない。これらすべての辛い苦しみを見てもなお、彼らは精進に動かされないのだ。どうしたら理解するのだろうか。バイシャヤセナよ、彼らは何度も繰り返し教えられなければならないのだ。」

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に話した：「尊い人よ、法を知らない若年たちはどこから来たのでしょうか。彼らはどこで倒れ、どこに生まれるのでしょうか。」

尊い人は言った：「聞くがよい、バイシャヤセナよ。彼らがとる人間の姿は宝石職人に作られるのではない。それは鍛冶屋によって作られるのではない。それは大工によって作られるのではない。それは陶芸家によって作られるのではない。それは王の恐れから現れるの

ではない。それは男と女の性交における否定的な業のために生じるのである。彼らはそれらの者達に何度も悪知恵を教えるので彼らに終わりのない鋭い痛みが生じるのである。そこでは過去の否定的な業の結果である鋭い痛みを経験するのである。バイシャヤセナよ、生じずにそのようなはなはだしい痛みを経験する若年達がまさにこの場に來たのだ。バイシャヤセナよ、このために彼らは会話も、お互いに話すこともない。したがってバイシャヤセナよ、それらの若年達は、善を知らないで、誕生を知らず、消滅を知らないで、人間の体を得ることはないであろう。バイシャヤセナよ、彼らが〔若年〕と呼ばれるもの達である。」

彼は言った：「尊い人よ、若年たちはどのように生まれ、どのように消滅するのでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、それはまるである男が木片で火に触れにきたようなものである。それから次第に木片は火に燃え上がるであろう。ちょうどそのように、バイシャヤセナよ、人間の体はその最初の起源を持つ。生まれてからは感情を得る。」

彼は言った：「それでは誰が良い生を得るのでしょうか。涅槃に入った人は誰ですか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、仏陀は実に良い生を得る。如来は実に涅槃に入る。バイシャヤセナよ、それはちょうどある王が一人の男を薄暗い家の中の地下牢に監禁するようなことである。そこでその男は暗い家の中に入った後、薄暗い地下牢を見るのである。それから、はなはだしい痛みを先に経験していたもう一人別の男が〔この男は破滅だ。痛みを経験しなかったために、彼の命は失われた。〕と思うであろう。彼はその場に火を持ってきて、そこから小さな火を家の中に持ち込むと、監禁されたその男は火の炎を見るであろう。それを見て彼は元気づけられ、勇気を奮い立たせるであろう。そして何らかの理由でその火は炎を上げ、その燃え立つ炎でその家は完全に焼かれて、その男もその場で焼死するであろう。それから王はそのものが焼死したことを聞き、不安を覚える。彼に次のような考えが及ぶ、〔私の支配下にはもう誰も監禁すべきではない。〕と。そしてその王は、彼の支配下に生きる人々を励まし、次のように言った、〔そなた達、恐れることはない。警戒することはない。保障はそなた達のものとなる。もはや私の支配下には鞭打ちや監禁はなくなるであろう。我は誰の命も滅ぼすことはない。そなたたち、恐れることはない。〕と。バイシャヤセナよ、ちょうどそのようなことだ。如来はすべての煩惱を滅ぼし、すべての病を治した。ちょうどその男が火事で体が焼け死んだように彼は、衆生のために利益、福祉そして幸福を促進させる。彼は束縛と監禁から衆生を開放するのだ。同様に、如来もまた衆生を解放する。彼自身、執着、嫌悪、無知の監禁から自由であるために、世界に衆生への光として現れ、老若の衆生を、地獄の場から、畜生、餓鬼、阿修羅の体から解放するのである。」

そして、上空の彼方から、次のような詩節が流れてきた：

ああ、大地、勝者の地、すばらしい大地がよく整えられ、そこでは種が一旦蒔かれれば、全く滅びることがない。
仏の浄土、勝者の浄土は勝者による賛美の伝言である。
師はすべての衆生に届くために方便を展開する。
涅槃の世界におりながら、この地上に現れる。
全世界を静めて仏陀を受け入れる人を清める。
彼は新人と年長者を解放する。
三世界からすべての衆生を解放して地獄の入り口を閉じ、
そして畜生、餓鬼を解放してからこの世を静め、次の世を幸福にした。

それから尊い人は微笑を見せて言った：

素晴らしい者を見ることは素晴らしく、仏陀を見ることは素晴らしい。素晴らしいものといえば法の善なる特質としてのこの大地である。
全僧集団を見ることは素晴らしい。
素晴らしいことといえばすべての悪を消滅させるサンガータの解説である。
このストラを聞く者達は優越なる道を成就するであろう。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは尊い人がいたところで手を組み敬意を表してから尊い人に次のように言った：「尊い人よ、微笑を見せるその原因と理由は何でしょうか。」

尊い人は言った：「血脈の子よ、これらの若年達が見えるか。」

彼は言った：「尊い人よ、見えます、至福の人よ。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、まさに今日、それらすべての者達が十地に確立する菩薩となるだろう。」

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは、八万ヨジャナの空上に立ち、そして八百億のデーヴァプートラ達が尊い人の上に花の雨を降らせた。それを見るなり、若年たちは手を組み敬意を表した。それから偉大なる菩薩は、空上に立っているちょうどそこから次のような言葉を発した。その時彼は三千の大千世界を彼の声で満たした。三十二の大地獄に生ま

れた衆生は彼の声を聞いた。三十二集團の神々もまた彼の声を聞いた。三千の大千世界は六つの方向に振動した。八万四千の竜王達は、大海の中で振り回された。三百億のラクシヤはこの惑星に came。二百五十億の餓鬼、夜叉、そしてラクシヤサ達は、アダカヴァティの大都市から来て、大きな集團をなして尊い人の前に立った。それから尊い人はそれらの若年達に説法をした。十方の一兆十億世界からそれぞれ自分の威神力を持つ偉大なる菩薩達が来た。

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは、尊い人がいたところで手を組み敬意を表して次のように尊い人に言った：「尊い人よ、至福の人よ、多くの、それは多くの菩薩達が集会し、共に座りました。尊い人よ、それは多くの神々と竜が集会し、共に座りました。また、それは多くのラクシヤサと餓鬼が、アダカヴァティの大都市からやって来て、法を聞く目的で共に座りました。」

その後、尊い人は偉大なる菩薩バイシャヤセナに、「血脈の子よ、来なさい。」と話しかけた。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは、自身の威神力で空から降りてきて、尊い人のいる所で手を組み敬意を表してから次のように言った：「尊い人よ、{法の集積、法の集積}と言われますが、その{法の集積}とは何でしょうか。」

尊い人は言った：「血脈の子よ、純潔を探すが、純潔を捜し出したときにすべての悪を避ける。わかるかい、血脈の子よ。若年達は純潔でないものを避ける。彼らは陀羅尼の力の所有者となり、またすべての法を賦与される者となろう。」

彼は言った：「尊い人よ、どのような手段によってこれら多くの衆生は法の集積を聞くために集会したのでしょうか。」

その後、尊い人は偉大なる菩薩バイシャヤセナに話しかけた：「バイシャヤセナよ、誕生はまことに苦しみであると言うことを聞かない者は多く存在する。彼らは老いが苦しみであることを聞かない。彼らは病が苦しみであることを聞かず、また悲嘆の苦しみ、嘆きの苦しみ、愛する者との離別の苦しみ、嫌いな者との出会いの苦しみ、又はすべての悲しみの原因となり、身体から生命を奪う死について聞かない。バイシャヤセナよ、これが{すべての苦}と呼ばれる。」

その後、若年たちはこの教訓を聞くと、手を組み、尊い人がいたところへ敬意を表して「尊い人よ、我々は本当に死ぬのでしょうか。」と言った。

尊い人は言った：「本当だ、血脈の子よ、そしてすべての衆生は死なねばならない。」

彼らは言った：「尊い人よ、死はどのようにやってくるのでしょうか。」

尊い人は言った：「血脈の子よ、死に際に、意識の最後の瞬間が起こると、三つの風— {意識の消滅} と呼ばれる風、{意識の破壊} と呼ばれる風、{錯乱した意識} と呼ばれる風— が死の時点で最終の意識を混乱させ、揺すり、そしてかき乱す。」

彼らは言った：「尊い人よ、死に際にて最終の意識の消滅が生じるときに身体を破壊する三つとは何でしょうか。」

尊い人は言った：「友よ、身体を破壊するそれらのものは {切断}、{貫き}、そして {負傷} と呼ばれる。」

彼らは言った：「尊い人よ、{身体} と呼ばれるこれは何でしょうか。」

尊い人は言った：「友よ、それは {燃焼}、{火に住すること}、{粘液の原因}、{粘液を垂れ流すもの}、{墓地を訪れるもの}、{愚かなもの}、{重荷で困難なもの}、{誕生から完全に苦しみであるもの}、{誕生により完全に動揺するもの}、{生命に完全に負かされるもの}、{そして愛する者から離別するもの} と呼ばれる。友よ、これらが身体の別名である。」

彼らは言った：「どのように死ぬのでしょうか。そしてどのように生きるのでしょうか。」

尊い人は言った：「ああ、長寿の者達よ、{意識} と呼ばれるものが死ぬのである。ああ、長寿の者達よ、{功德} と呼ばれるものが生き延びるのである。友よ、百万の神経で繋がっており、八万四千の毛穴で繋がっており、一万二千の肢体で繋がっており、そして三百六十個以上の骨で繋がっている身体が死ぬのである。八十四種類の虫が身体の中で生きている。死はすべて息する生き物に起こり、そして死である消滅も起こる。それから息あるすべての生き物は絶望的になる。人間が死ぬとき、乱れた風が身体の中にあるすべての息ある生き物が共食いするようにかき乱れる。それからそれらは惨めな痛みに苦しむ。彼らの側からすると、あるものは息子達のために苦しみ、またあるものは娘達のためや、親戚のために苦しむなど苦しみのすべての悲しみに悩まされる。すべてが悲しみの矢に突き刺されてお互いに共食いを始める。すべての者達が共食いをし、最終的に二つの息あるものが残る。それらは七日間戦い、そして七日目の終わりに一つの息あるものが克服しもう一つは逃げる。おお、年長者よ、{法} と呼ばれるものは何であろうか。どう思うか。ちょうど

すべての息あるものが、お互いにけんかして死んだように愚かな凡人は、けんかに夢中になりお互いに戦う。彼らは誕生を恐れず、老いも病も死も恐れない。ちょうどそれら二つの息あるものが戦うように、愚かな凡人はお互い戦うのである。それから死に際に、分別ある者に「おまえ達は自信をお持ちであるか。おまえ達にこの世の不幸が見えないというのはどういうことか。」と話しかけられる。彼は「ああ、長寿の者よ、私は誕生の不幸を、老いの不幸を、そして病の不幸を見た。私は死後のすべての不幸を見た。」と言った。彼は「おまえが創られるべき根本善を創らなかったのはどういうことか。それから両世界の幸福へと導く法の集積である根本善を創らなかったのはどういうことか。友よ、次に聞くが、おまえは何故、誕生と死から解放されるために善の集積をなさなかったのか。基本的な精神理解について熟慮しなかったのはどういうことか。地上のドラをたたく音を聞かなかったのはどういうことか。施しものを与え如来の浄土に根本善を植える人々を見なかったのか。如来へ香水、飾り、又は灯籠、又は固形や流動の食べ物を与えるのを見なかったか、そして仏の伝言に専心する四集團—比丘、比丘尼、ウパサカ、ウパシカ—、が満ち足りているのを見なかったのか。それで彼のために「ああ王よ、自分のために悪を為さなかったか。ああなんていうことだ、ジャンブヴィパ（南瞻部州）に来るのに悪を為したか。」と彼らは言った。

その時、法王はその死んだ男へ勧告の詩節を発した：

如来が現れるのを見て、ドラの音を聞いて、
そして説法を聞くことで平和に住し、涅槃へと導かれるのに、
この世と来世のためにおまえがその功德を積まなかったのはどういうことなのか。
おまえは悪業の果として地獄の苦しみを受けるであろう。

そしてその男は答えた：

私は悪友に従う愚かな心の持ち主であり、
そして欲に侵された心で悪行を為した。
欲に従ったために恐ろしい結果が私にふりかかった。
私は生き物に害を与え、僧に属するものを破壊する原因をなした。
罪深い私自身の手で仏塔を破壊した。
荒々しい言葉を発して母を悩ませた。
自身の体で為した犯罪を自覚している。
次の生はラウラヴァの恐ろしい地獄で迎えるようだ。
サムガタ地獄で痛みを味わい、同様にプラタパナ地獄でも痛みを味わい、
阿鼻大地獄ではすさまじい痛みを味わうことだろう。

パドマ大地獄では究極の悲しみによって泣き叫ぶであろう。
私は多大なる恐れとともに、カラストラに百回生まれるであろう。
地獄の衆生は叩き潰されると、またその恐れを感じる。彼らは非常な恐れに百ヨジャナも陥る。
まっさかさまに落ちると二度と出口を見つけられないであろう。
クシュラと呼ばれる地獄では一千のナイフが現れるであろう。
目前には何百億ものナイフが生じる。
自分の悪業のために、それらは私の肢体を裂くであろう。
巨大で恐ろしい騒動のゆさぶりがこの体全体を切り刻むであろう。
私はそのような痛みを地獄で経験しなければならない。
すべての衆生は私の体が究極に苦しむのを見るであろう。

私は他人の富を、私に与えられたものでもないのに家族のために奪ってしまった。
私の息子も、娘も、兄弟姉妹、また両親、友人、親戚の大勢、召つかい、また職人、雇い人、牛、そして家畜：私は自身の悪行を通して道に迷わせてしまった。
私は金銀の器に迷い、そして同様に洗練された衣服と家を建てることに迷った。
よく塗装された家を建て、男女にまみれて、制御のきかなくなった私の心はリュートにのって音楽を奏でて楽しんだ。
私は体に香りの水をつけたが感謝の念は感じなかった。
おお、知覚のない体よ、私は御前のせいで迷ったのだ。
私を守ってくれる者はおらず、その後も誰も私を守ってくれないであろう。
この舌で甘辛を享受し、たくさんの素晴らしい飾りが私の頭に結ばれたことで、私は巨大でおそろしい騒動のゆさぶりの中の苦しみにある。
私の目は美に誘惑された；目から私自身を守るものはない。
私は二つの目が悪の原因であると見た。しかしそれより更に耳によって私は強要された。私の腕はダイヤモンドのピアス、両腕には腕輪をつけ、指には指輪を、そして首には真珠をつけた。
両足も完璧に飾られ、金のチェーンをつけた。ありとあらゆる宝石が身に着けられ、同様に金のベルトを着けた。
究極の富を享受して私の心もまた究極に楽しんだ。
私はとてもやわらかく、見るに美しいカーペットやベッドなどのものを堪能した。
私は浮かれた遊びに暮れる。高級な香水を浴びて、カンファーや白檀のような高価な香水を着けるであろう。
部屋を香りで満たして、洗礼された衣服を作らせ、ムスクの香り、甘いジャスミンオイル、ジャスミン、チャンパカなどを着ける。
それらを塗りつけて私は洗礼されたキャラコと白い衣装に身を包む。

象の背中から降りれば乗馬をしたくなる。
自分が王であると思ひこみ、人々は目の前から走り去るであろう。
歌と踊りをよく訓練された女中ともいい中にもなる。
動物は危害を加えなくとも、私は動物を殺した。
このように、他の世界のことを知らずに悪を犯した。
他のものの肉を食べたために、この抑えきれない不幸が私に近づいた。
私は死が何であるか知らなかった。
私は無知であった。
この体も養った。
そして今日私に死がやって来て、実に私の守護者はいない。
親戚達よ、なぜ私の顔を覗き込むのか。
何のためにあなたの服を裂くのか。
何故泣き、そして悲嘆を発するのか。なぜその髪を引きちぎるのか。
何故あなたの血をも流すのか。なぜ頭に塵を撒くのか。
なぜあなたの胸をたたくのか。私は不幸な一生を送り、そしてなぜ後に残されるべき家族にしがみつくのか。
私の体は狼に、犬に、カラスに、そして鳥たちに貪り食われるであろう。
この体を養うことには意味がない。死の大蛇にとりつかれてその男は常に誕生するであろう。
この恐れから解放されるにはそのような薬を与えられる必要がある。
ある医者から与えられた薬は、欲望の大蛇から私を助け出すには決して及ばない。
今ちょうど臨終の時に来て、私には法の薬が与えられるべきである。
私に肉を与えて、間違いなく死んでゆくこの体を養わないでおくれ。なぜ不幸が供養されなければならないのか。なぜ悪の塊を受け取らなければならないのか。
この体は、実に破壊されるためだけに完全に養われた。
息子、娘達よ、なぜその目で私を見るのか。
私はこの病からどんな理由で、そしてどんな目的で救われなければならないのか。
皆、息子、そして娘達よ、どのような破滅をも引き起こすのではない。
おまえ達を養うために、私は他の富を奪った。
ここに、臨終の時 came。何故絶望することがあろうか。
悪趣に生まれることはとても恐ろしく、そして死ぬことも苦しみに満ちている。
感覚、意識、境遇、知覚、欲、無知、そして煩惱、これらは実に苦痛な結果を生じる。
罪深い家庭に生まれること—それは実に不幸に束縛されることである。
宗教的な功德が浅いことを思い、他の者達に不幸を引き起こした。供養や持戒は消滅し、そして私は法に背向き、そしていまだに誕生を知らない。

それらが欲望の大蛇に苦しめられていることを見抜かずに、どうやって無知な衆生は迷うことなく解放されようか。

解放の意味をも知らずに、欺くことを通して私は悪を為した。

愚かにも欲望に混乱し、心は常に全く混乱している。

あらゆる種の束縛によってこの体は完全に火に燃え上がる。

この体は幸福の存在しないところ、どこから幸せが見出されるのかもわからない所へ完全にゆがみさまよう。

幸福は仏陀の浄土にて供養される。

法輪は最高の薬である。

戒律と戒律の真実は如来の清浄なる声である。

その後、尊い人は、偉大なる菩薩バイシャヤセナに話した：「バイシャヤセナよ、同様に、衆生は良い行いのどんな果報も得ることなく、どのような守護者もなく、臨終のときに嘆くのである。」

こう言うと尊い人は次の詩節を発した：

悪業を為して、そのもの地獄へ落ち、燃え上がる衣をまとい、渴きから溶けた鉄を飲むであろう。

燃え盛る火の燃えさしが身に降りかかるであろう。

火あぶりはとても耐えがたい。すごいといえば地獄の恐怖である。そこでは身は完全に焼かれ、享樂を知ること、法を知ることさえもない。

愚か者は法でないものに迷い、僅かな幸福さえも得ることはない。

信心と共にあり、道徳を完成し、智慧と偉大な苦行、善友と交わる者達は、まもなく如来となろう。仏陀は最高の勤勉を修行するすべての衆生を抱くためにこの世界に現れる；そして同様に慈悲の心でもって善行を説くであろう。バイシャヤセナよ、おまえは最高にして清らかな模範を示した。

これらの言葉を聞き、最高にして輝かしいものを成就し、完全に誕生からの解放を見て、名声ある声を持つ指導者、仏陀を見る。

彼はこの世界の父母であり、そして〔菩提〕と呼ばれる。この法を説くものは最高の善友であり、見つけがたい。仏陀の説法を尊敬とともに聞くものは無上の仏陀、彼岸の者となるであろう。

仏陀の崇高な息子達を尊敬しする者達は皆、この世界で解放され、守られるであろう。

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、この山の

側面が振動しているのは何故ですか。」と。

こう言うと、尊い人は偉大なる菩薩バイシャヤセナに次のように話した：「バイシャヤセナよ、良く見てみるがよい。」

偉大なる菩薩、バイシャヤセナが見てみると、地面が四方向に裂けるのを見た；そして地面が割れたところの割れ目から、天底からの二千人の人々、天からの二千人の人々が現れた。

その後、それらの若年たちはそれを見て尊い人に言った：「尊い人よ、ここに生まれたその者達は誰ですか。」

尊い人は言った：「この人々の山を見たことがあるか。」

彼らは言った：「尊い人よ、見たことがあります。」

尊い人は言った：「この人々の山はおまえ達の幸福のために生まれたのだ。」

彼らは言った「彼らにも死は訪れるのですか。」

尊い人は言った：「友よ、そうだ。すべての衆生に死が訪れる。」

その後、それらの若年達は、最初に生まれたものが手を組み、尊い人がいる方向に敬意を表して、彼に言った：「我々はまた生と死を見るに耐えられません。」

尊い人は言った：「精魂の力を得たいか。」

彼らは言った：「我々は如来にお会いしました。その後に我々は、説法を依頼して、その法を喜んで聞きました。我々は、如来の弟子である僧集団と、菩薩の持つ威神力の偉大なる力を見ました。尊い人よ、同様に、我々は生と死を見るに耐えられません。」

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは、威神力を通して五百の菩薩達と共に席から立ち上がり威神力ですべて空中に舞い上がると結伽趺坐を組み、瞑想に入った。彼らすべての体からライオン、虎、大蛇、そして象が現れ、それから威神力を通してたくさんの早変わりなをならべて見せた。彼らは、二十ヨジャナの高さの山頂に結伽趺坐を組み、百億の太陽と月に変身し、それらの太陽と月の降下を引き起こした。

その後、それら若年たちは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、偉大なる光線が現れ、この世にすばらしい化身が現れたその原因と理由は为什么呢。」

尊い人は言った：「血脈の子よ、それらの太陽と月を見たか。」

彼らは言った：「尊い人よ、見ました。至福の人よ、それらを見ました。」

尊い人は言った：「それらの光線と素晴らしい化身は、菩薩自身の体から示されたのだ。それらを示してから、多くの生き物の恩恵のために、多くの生き物の幸福のため、世界への慈悲と共に、そして神々と人間の大衆の利益、恩恵、幸福のためにも法を説くであろう。ここに体力の強さを示し、それに匹敵した力を示すであろう。」

彼らは言った：「尊い人は、この輝かしい光線の現れを引き起こす法を説いてくださいますように。」

こう話すと、尊い人は次のように偉大なる菩薩バイシャヤセナに話した：「バイシャヤセナよ、三千の大一千世界が六方向に振動したのを見たか。」

彼は言った：「見ました、尊い人よ、見ました、至福の人よ。私はあることについてお尋ねしたいと存じます。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、何でも聞くが良い。それらの質問に答えて、おまえの思いを満たそう。それらを明白に説明しよう。バイシャヤセナよ、我は、現在過去未来のすべての出来事を説明しよう。」

彼は言った：「尊い人が私の疑問を晴らしてくださいますように。尊い人よ、私は如来が八万四千のデーヴァプトラ、八百四十億の菩薩、百二十億の竜王、百八十億の夜叉、二百五十億の餓鬼とピシャチャに囲まれているのが見えます。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、それらの者達は我から法を聞くためにここにいる。その他にここに集まる理由があろうか。バイシャヤセナよ、今日彼らは輪廻そのものを越えるであろう。まさにこの日に全ての衆生が十地に確立した者となり、恩恵を受けるであろう。十地に確立してから後に、涅槃の境地に据えられるであろう。」

老死から自由になるためには、善行為されなければならない。欲望の罟をやぶって

から、その者は仏陀の秩序に据えられるであろう。」

彼は言った：「多くの衆生が様々なところからここに集まり、尊い人を取り囲んでいるのは何故ですか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、聞くがよい：

それらの愚か者たちは彼らの解脱がどこなのか知らない。多くの若年たちは陀羅尼を得るであろう。十地を得るために仏陀の活動を果たすであろう。法輪をまわし、法の雨を降らすであろう。このようにここに集まった衆生達は私の説法を喜ぶであろう。神々、竜、餓鬼、阿修羅、そして非常に凶暴な者達は十地に据えられて法の声を発するであろう。彼らは法のドラをたたき、法の巻貝を吹くであろう。これらの若年たちもまた、精魂の源を持つものとなろう。今日、彼らは、まさに如来が達したように法を成就するであろう。」

それから五千人もの若年たちが席から立ち上がると尊い人がいたところに手を組んで敬意を表し、次のように尊い人に話しかけた：

我々はなぜ輪廻における死に終わりを告げようとししないのか。
尊い人よ、この体は重荷であり、恐ろしく、そして耐えがたい。
道は完全には理解されていない；実際に道も存在しない。
我々には守護者が見えない。我々は一同にそろって懇請します：勇気をお与え下さい。
指導者が説法をなさってくださいますように。我々は僅かな智慧もなく生まれました。
享樂は望みません。仏陀がこの耐えがたい不幸から我々を解放するために説法をなさってくださいますように。
我々がどこに生まれようとも仏陀にお目にかかることができますように。

その後、偉大なる菩薩バイシャヤセナは、若年がいたところに行ってから次のように言った：

あなた方はいろいろと味覚にとんだ食事をとるべきだ。
準備が整った後には、恐れを抱くことなく法を聞きなさい。

彼らは言った：

聖なる長老よ、あなたは誰ですか。我々はあなたを知りません。
あなたはとても優美なお方と見え、お姿はまさに静寂の代名詞であります。
それはちょうど餓鬼、地獄の世界、そして畜生の世界から救われた衆生と同様に、
あなたのすべての悪は沈静されております。
あなたの手中には七種の宝石で出来た器があります。
お体には金の糸をまとい、輝きの集まりに飾られているのが見えます。
我々にはあなたがお話になる静かなお言葉に答えることができません。
我々には食事やおいしい飲み物は必要ありません。
食べ物から排出物が生じます。
同じように、飲み物は尿となって排出されます。
血は液体から造られます；同様に肉は血から造られます。食べ物と飲み物の混合物
は我々には必要ありません。
絹の心地よさ、羊毛の服、そして洗練された衣服は必要ありません。
金の腕輪は必要ありません。真珠の飾りも必要ありません。指輪も必要ありません。
これら全てが無常の本性のものであります。
我々は生き続けることを望まない不幸な生き物です。
神々の幸せと法の施しを得るためには善友が必要なのであり、転輪の王は必要あり
ません。
究極の享楽の大陸を去れば、転輪の王も死ぬであろう。息子たちや夫人と娘達でさ
えも彼の後は追いません。七種の貴宝が彼を追うことは決してありません。
大衆が彼の後を追うことはありません。
同様に、後に彼の先に行くことも不可能です。
王の命は無常であり、目的もなしにさまよいます。たくさんの悪業を犯し、彼らは
ラウラヴァ地獄に落ちます。
彼らは四大陸に散らばる七つの貴宝の偉大なる奇蹟の力に囲まれます。
衆生がラウラヴァ地獄に陥る果を生ずるとき、その奇蹟の力はどこへ行ってしま
うのでしょうか。
彼らの領土は見つかりません。
死から奇蹟の力を生じさせるのは不可能です。
長老よ、お聞きください。如来のおいでになるところへお行きください。
如来は我々の両親のようなものです。
彼を見に行ってください。
我々は母を持たず、父も兄も持ちません。
世界の上師、如来はまさに父と母であり、まさに太陽と月であります。
彼は幸福への道を示します。彼は再度生まれることがありません。

彼は輪廻から衆生を救済します。すごいといえば、欲望の川の恐怖です。彼は我々を川から救出することのできるいかだです。

後に再度戻ることのないように衆生を向こう岸へ渡します。

彼は清浄なる法も説き、そして無上なる菩提を示します。

我々に食べ物は必要ありません、そして宮廷の果実も望みません。神々の世界に進むことも恐ろしい地獄に落ちたくもありません。

人間としての命は幸福です：そこには全知の人が現れるからです。

命は短く、それはさまよい、そして自分の体により悪業が為されました。

彼らは死について何も知らずに宮廷の享楽を欲しています。生死の罨にかかり、恐れもどんな知識もありません。

その心は混乱し、永続もしません。

優れた法を知らず、どのような善行も為さず、静けさの世界も知らず、そして転生に関してはどんな悲しみも感じません。彼らは何度も生まれるであります。

長期にわたり苦しみを受け、常に打たれ、懲らしめられてから他人に生け捕られ、同様に縛られ殺されるでしょう。

過去の悪魔に付き添われ、五つの足かせに縛られ

望みを絶たれて痛みと不幸に苦しめられるでしょう。

意識が消滅するとき、彼らはあわれにも嘆き悲しむであります：

「誰が私を守ってくれるのだろうか。すべての享楽と、金、銀、そしてクリスタルを供養しよう。また私は奴隷となり奴隷の生活をしよう。すべての仕事を私がしよう。宮廷の享楽はほしくない。富と穀物は必要ない。悪業をおかすことから解放されないこの体はほしくない。」と。

長老よ、同様に、我々には食べ物は必要ありません。

おいしい食事を食べるそれらの王もまた死ぬでしょう。

最高の飲み物を飲む神々もまた死にましよう。

王達は全く実体のない固体と液体を供給する食事をします。王達は味に執着し、そして悪業もたくさん犯します。どんな実体もなく、無常である味にどうして執着すべきでしょうか。

我々はどんな食事もほしくありません。食べ物は真に不必要であります。

我々に苦しみからの救いはあるのでしょうか。

必要なものは、現実の本性です。

我々は束縛から救われたいです；我々は欲望から解放されたいです。

すべての足かせから救われるために、我々は仏陀、偉大なる聖人、世界の守護者に帰依します。

衆生の苦しみを見たのなら、我々の代わりに行って敬意を表してください。

あなたのお名前は存じ上げません。お名前をお教えてください。

バイシャヤセナは言った：

あなた達、そしてすべての衆生が同様に名前を聞いたがる。
如来は十億の若年達に囲まれている。

彼らは言った：

あなたは仏陀の従者です。あなたのお名前は深遠で壮麗であります。すべての衆生
たちも同様に名前を聞いたがっています。

彼は言った：

私の名前はバイシャヤセナだ。私は衆生の薬（バイシャヤ）であり、最高の薬をあ
なた達に説くことにしよう。
すべての病に苦しむ生き物は、すべての病から救出されるであろう。情熱の病は大
病である；それは耐えがたくそして世界を破壊する。
衆生を迷わせる妄想の病は大病であり、それは彼らを地獄の世界へと進ませ、同様
に畜生の世界、そして餓鬼の世界へと歩ませるであろう。
無知、そして怒りも同じように静められるべきである。

彼らは言った：

この正法を聞いたことにより、我々はすべての不幸、愚かさ、そして無知から救出
されますように。
すべての不幸から救出されたあかつきには、すべての悪業が放棄されます。
我々は法の供養を聞く；そしてすべての悪を放棄したあかつきには、耐えがたい恐
怖もまた放棄されます。
薬、この王薬すべての病を静めすべての不幸を取除く；そして我々は実に迅速に仏
陀を見るであります。
長老よ、如来に敬意を表すためにまもなくご出発ください。
敬意を表し、世界の指導者に我々の言葉をお伝えください；そしてこの病を静めて
ください。
全身が燃え上がり、それは容赦なしに燃えています。この耐えがたい火を静めてく
ださい。

この体の重荷は大いなる重荷です；これは真に耐えがたく鋭い重荷であり、我々に苦痛な不幸を与えます。

我々に清らかな慈悲をお持ちください。

生き物は常に怒りと妄想の重荷にしいたげられ、取り乱しています。

何度も重荷を背負い、その重荷から自由になる方法を知りません。

彼らは、救済の方法を知らず、救済への道さえ見ようとしますが、それでも死の意識が現れる瞬間には、恐怖を生じません。

我々は死が幸福の場とは決して思いません。

錯覚はどれも死ぬことがないでしょう。

死んだことでさえ記憶にありません。

その先のことを考えず、そのために常に病で苦しみ、そして欲望に動揺するのです。

食べ物を食べると我々はどんな感覚もなくなり飽き飽きして、どんな知識もなしに不幸に疲れ果てます。

あなたから無知のような不幸が生じ、そこから意識、思考、そして感情が生じます。

すごいといえば、法意識を知らないものたちの重荷の怖さであります。

愚かさと欲にさまよい、体は重荷にすっかり包まれております。

この世に生まれることは無意味であります。

沐浴すること、油を塗ること、そして究極に洗練された清潔な衣服を必要とするこの体になにが起こるのでしょうか。

おいしい食事は必要ありません。

同様に、耳は五種類の楽器で奏でられる美しい音を聞きます。

目は七種の宝石でできた形に執着します。

舌は甘いものをぜんぶ味わいました。

体は常にやわらかく洗練された衣服を感じています。

この肉体も楽しみました。

この体には感覚がなく生まれてきたので、楽しみにも出会いました。

私はこの両足に靴ときめこまやかな靴下をはいて心地よくしましたが、死に際には衣装や軟膏はそれらを守ってはくれません。

この体もまた守られることはできません。

どうして衣装と軟膏が必要であるといえましょうか。

「人」として知られるこの体は偉大なる呼吸の力と、聴聞と熟考の力を授かります。

その体は偉大なる特質を備えております。

以前はすべての馬と象たちに囲まれ、その体には解脱の法を与えることなく遊び歩いていた。

私はどんな悪業を好んだのでしょうか。

来世のことを知らずに私は悪の遊戯に参加するところでした。

私は何度も生まれ、再度死が私に近づいております。

私は何度も不幸を見ます。

悲嘆の中に母が死ぬのを見て、そして父、親戚、姉妹、息子の死を見ます。

妻達が死ぬのを見ます。

五蘊はすべて空であります。

この心は情熱に執着します。

欲望に消耗されきった心でもって私の自信は打ち砕かれました。

静寂の法を感知できません。

死に喜びはありません。欲に汚れた心のために、私はなんの供養もしませんでした。

いまだここを去らない欲に匹敵する悪はありません。

我々は錯乱の中に生まれた。全世界が錯乱しております。

我々は錯乱しているので、音を聞いてもそれが清浄なる法であることには気づきません。

この体は解脱を信じ、探し求め、またそれを熟慮することは永遠にありません。

主としてこの世の生き物のために仏陀が教訓をお説きになりますよう。

仏陀はこの世の父母であります。

仏陀は道を示す人であります；そして彼はジャンブディパのあらゆる場所に宝石の雨を降らせませす。

愚かなものは法の集積がどのようなものであるかを知りません。

悟りを決心することにより、その者は法の集積を得ます。

すべての境遇は空であります。

同様に富の享樂も空であります。

自身も空であると見るべきであります。

そう見ることにより、その者はどんな欲からも自由であります。

長老バイシャヤセナよ、我々の言葉をお聞きください。

菩薩達のために、我々の伝言を持ってお行きください。

輪廻の不幸を忘れずにいることで菩薩は疲れを知りません。

彼らは精力と偉大なる禁欲を備え、すべての善を集めます。

お行きください、師の住するところへ。正しく目覚めた師、少しも疲れを知らない克服者、その師が住んでいるところへお行きください。

我々の代わりに次のように懇請してください「あなた様は悪のマーラを克服し、その精力をも一掃しました。仏陀になるという思い持つすべての衆生を抱くために、まもなく法が輝きますことを。」と。

我々は法を聞きませんでした。

我々の恩恵のためにどうか〔長老よ、お行きください。〕。

三十二相を備えた如来を我々はまだ見たことがありませんので、そこへ渡ったこと

がありません。

我々は揃ってご挨拶の言葉を捧げます。

バイシャヤセナは言った：

「ちょっと上を見上げて、何が見えるかごらん下さい。」

彼らは上を見上げ、全部で三千五百の会場を見た。それらはすべて七種の宝石で飾り立てられ、宝石の網で美しくかざられた席があった。真ん中には花が散らされており、すばらしい富とお香もまた散りばめられていた。それから若年達は長老に次のように尋ねた、「宝石の網にかざられ、すべて蓮華葯のように配置された会場を見るのは何故ですか。」と。

バイシャヤセナは言った：

「それらの席はそなた達が仏陀を見に行くために、世界を超越した師、世界の光が住む所へ行く手助けをするためにあるのだ。」

彼らは言った：

我々には行き方がわかりません；そして我々には如来が見えません。どこが道なのかわかりません。敬意を表するにはどこへ行ったら良いのでしょうか。」

バイシャヤセナは言った：

終わりのない空には正確に届くことがないように、無死を与える師に敬意を表するために行くということは不可能である。ちょうど須弥山が存在するように、師もまた彼の場所に住んでおられる。仏陀は須弥山や奥底深い大海のようである。三千の大一千世界における埃の小さな分子の数ほど菩薩達が十方からやって来ても、仏陀が現れたところが分からずにこの世の光を崇拝したのだ。

彼らは言った：

「我々は世界の守護者を見るでありましょう；我々は完成されたいと存じます。我々衆生は、師に敬意を表し、そこから果を得たいと存じます。」

バイシャヤセナは言った：

「構成された状態から我々を救済し、衆生を理解する師は、お香、飾り、又は軟膏などは好まない。

心を克服した仏陀、その人のところへ行きなさい。

もっとも耐えがたいマーラも彼とは戦わない。

そしてその者は陀羅尼を迅速に得て、死の勢力へ歩むことはないであろう。それからその心はよく専心し、如来を見ることであろう。

その後、尊い人、如来はカッコーの甘い声と共に微笑んだ。それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは席から立ち上がると尊い人がいたところに手を組んで敬意を表し次のように尊い人に言った：「尊い人よ、尊い人の口から八十四万の光線を発した微笑を示したその原因と理由は何でしょうか。それらすべての三千の大一千世界はすべての光線で満たされました；そしてまた三十二の大地獄もそれらで満たされました；三十二の神々の居所さえも照らし出されました。それらの光線はまた青、黄色、赤、白、けし色、水晶色、銀色などの様々な色で尊い人の口から発すると、三千の大一千世界の衆生に喜びに燃え立たせ、舞い戻ると尊い人を七回周縁してから彼の頭上に消えた。

それから再度、偉大なる菩薩バイシャヤセナは次のように尊い人に言った：「尊い人よ、もし機会をお与え下さるなら、尊い人、如来、阿羅漢、完全なる仏陀についてお尋ねしたいと存じます。」

こう言うと、尊い人は偉大なる菩薩バイシャヤセナに次のように言った：「バイシャヤセナよ、何でも聞くが良い。どんなことでも解説し、おまえの思いを満たそう。」

彼は言った：「尊い人よ、三百億の若年達が現れました。彼らは如来の微細な解説を理解してから、次のように老年たちに話しました、{老年達よ、あなた方は法を知らない。あなた方は、法が存在しないと言う。あなた方は不幸を好む。そのために微妙なものは存在しないと見て、弊害を及ぼすのだ。} と。尊い人よ、彼らはなぜ早く、受け入れやすい言葉を話すのでしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、彼らがこのような言葉を話す理由がわからないか。彼らは如来にやさしく、快い言葉を話しているのだ。バイシャヤセナよ、法を聞くことによって彼らはすべての法の意味を抱き、すべての善を保持し、そして彼らは皆陀羅尼を理解するのであろう。その後、彼らは十地に据えられるであろう。今日彼らは偉大なる法のドラの音を発するのであろう。今日、彼らは偉大なる法体系の保持者となろう。バイシャヤセナよ、これらの会場が見えるか。」

彼は言った：「尊い人よ、見ました。至福の人よ、それらを見ました。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、これらの若年達は、今日、これらの会場に足を踏み入れた後に法の明白な悟りを得るであろう。まさにこの日、今日、彼らはすべての正法とにより完全に成就した者となるであろう。彼らは今日、偉大なる法のドラをたたくであろう。神々の居所では法の明白な悟りを得るであろう。地獄衆と多くの邪悪者達の居所では、如来の完璧な智慧の論証を聞いて輪廻を破り、それらは勝者となるであろう。その時、九百億の老年達は皆、預流果を得るであろう。また彼らすべてが法の所有者ともなるであろう。バイシャヤセナよ、彼らは皆、完全に全ての苦しみを放棄するであろう。バイシャヤセナよ、彼らすべてが如来を見る人となろう。バイシャヤセナよ、彼ら全てが偉大なる法のドラの音をも保持するであろう。バイシャヤセナよ、四方を見てみよ。」

偉大なる菩薩バイシャヤセナは四方を見渡し、東方からガンジス川五千本分の砂粒の数ほど多くの菩薩を見た；南方からはガンジス川六千本分の砂粒の数ほど多くの菩薩が来た；西方からはガンジス川七千本分の砂粒ほど多くの菩薩が来た；北方からはガンジス川は千本分の砂粒の数ほど多くの菩薩が来た；天底からはガンジス川九千本分の砂粒の数ほど多くの菩薩が来た；天からはガンジス川一億本分の砂粒の数ほど多くの菩薩が来た。尊い人の面前に到着し、彼らはその両側に着座した。

それから偉大なる菩薩バイシャヤセナは尊い人に次のように言った：「尊い人よ、空に現れた赤黒い形は何でしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、あの赤黒い形が何か知らないのか。如来は知っている。バイシャヤセナよ、これはマーラだ。バイシャヤセナよ、見たいか。」

彼は言った：「はい、尊い人よ、見たいです、至福の人よ。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、同様に、ガンジス川一億本分の砂粒の数ほど多くの菩薩が到着した。」

彼は言った：「尊い人よ、それらの菩薩達が到着したその原因と理由は何でしょうか。」

尊い人は言った：「バイシャヤセナよ、彼らは若年達のためにここへ来たのだ。これらすべての者達は、瞑想の法を保持するであろう。バイシャヤセナよ、様々な威神力を通してここへ来た大衆の幾つもの集団が見えるか。」

彼はいった：「私はガンジス川一億本分の砂粒ほど多くの菩薩が見えますし、ガンジス川本分の砂粒ほど多くの菩薩達が威神力を：多くの形、多くの色、そして多くの外形に据えられたのを見ました。私はこれらの菩薩達が、優勢なる者の法の状態におかれたことと、これらの菩薩達が、彼らの従者と共に法に住することに確立したのを見ました。」

尊い人がこれらの言葉を話したときに、偉大なる菩薩サルヴァシューラ、偉大なる菩薩バイシャヤセナ、全ての老若年達、そして神々、人間、阿修羅、ガンダラヴァスのような従者と共にいた全ての者達は喜び、尊い人の話を賞賛した。

聖典 サンガータスートラ ダルマパルヤヤを結ぶ。

チベット語から英語への翻訳における奥付：

このチベット語から英語への初版翻訳文は、ニルンドウツプ ダムチョ氏により可能な限り早く多くの人々にこの経が吟唱されるようにその中間処置として供養された。すべての誤りは彼女自身のものである；良く翻訳されている部分は、2002年9月から2003年1月までを通し、ウイスコンシン、マディソンにおいてゲシェ ルンドウツプ ソパが親切にも彼女と共に翻訳文の最初の半分を読んでもくださった結果である。翻訳は台北版の“bka’ gyur” をラサと北京版に基づいた校訂とサンスクリット語を照会しながら使用して行なわれた。

サンスクリット語から英語への翻訳における奥付：

サンスクリット語から英語への翻訳は、近年のスリランカ学者である R.A.Gnatilaka によって1967年にケンブリッジ大学に提出された学術論文である未出版の博士号卒業論文の中に見つかった。Gnatilaka によって翻訳されていないサンスクリット語の用語の大部分は、吟唱と理解を易しくするためにこの場で英語に翻訳された。その他の準備段階の学術論文は、ペン ルンドウツプ ダムチョー によって、原文のサンスクリット語を参照しながら、幾つかの個所を英語の文法、句読法、そしてその他、再翻訳に選んだ文を改訂してこのように翻訳された。

最終版、2003年6月20日。

2004年9月、FPMT 教育部門におけるベン コンスタンス ミラーにより軽く照合された。

日本語への翻訳における奥付：

日本語の経典は2005年2月に渡邊 奈穂子により同経典の英語版から日本語へ翻訳されたものである。